

『すてきな終末を』

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第一章

- 憧憬 -

白い会議室で、数人の男女が話をしている。

国籍も年齢もまちまちな、不思議な集団だ。

機能的な会議机が、細長い長方形を描くように配置された、清潔そうな部屋である。その部屋の一番奥にあたる席に座った若い女性が、この会議の座長役らしい。

アングロサクソン系の白人である。ストレートの金髪に、ミルク色の肌。どこか貴族的な、温かみを感じさせない美貌。大きな蒼い瞳には、二十代半ばから後半と思われる彼女の年齢に似合わない、どこか超然とした光が宿っている。

彼女は、流れるような英語で、何事かを言った。

それに対し、小太りで血色のいい中年の東洋人が、北京語で答える。

独特の音韻の言葉の中で、「L」というアルファベットだけが浮いて聞こえた。それが、この金髪の女性の、この場での通り名らしい。

東洋人の隣に座る、快活そうな赤毛の女性が、やはり英語で何事かを言う。年齢不詳のLよりも、おそらくさらに若い。二十歳を越えたか越えないか、というところだ。

「それなら大丈夫ですよ、バーネットさん」

赤毛の娘にかけられたその言葉は、日本語だった。

発言者は、白衣をまとった、二十代半ばくらいの青年である。やわらかそうなぼさぼさ頭に白衣という、あまり風采の上がらない外見だ。しかし、眼鏡をかけ、柔和な表情を浮かべたその顔は、それなりに整っている。

「実験結果は、甘博士の理論通りの数値を示しています。MWVの開発は最終段階に入りました」

彼の言葉を聞き、一同はみな満足げに肯いた。

そして、再び英語、ドイツ語、ロシア語などで、発言が交わされた。会議の参加者は、皆それらの言語全てに精通しているため、めいめいの母国語で発言ができるのだ。

「速水俊司」

最後に、Lが、日本人青年に語りかける。正確な日本語の発音である。

その後の、英語で語られたLの言葉を、俊司と呼ばれた青年は、穏やかな笑みを浮かべながら聞いた。

「ご心配なく、L」

俊司は、ほんのかすかに透明な悲しみをうかがわせる表情をその白皙に浮かべながら、ゆっくりとした口調で言った。

「僕のMWVは、確実に、人類を終末に導きます」

俊司の言葉に、Lは、妖しい笑みをその美貌に浮かべた。

速水早紀は、ぼんやりとした表情で、学習机の前に座っていた。

厚手のカーテンに隠された窓の外は夜。雲が空を覆っているのか、星一つ見えはしない。いわゆる高級住宅街の中でも、一際広大な敷地を誇る早紀の家は、どんよりとした静寂に包まれていた。

父も母も、家にはいない。使用人も、今日は皆帰っている。

兄が帰るはずの日だというのに、家中がそれを無視しようとしているような、そんな感じだ。

だから、せめて自分だけは、兄が帰宅するまで起きていようと、早紀は思っていた。

普段だったら、とっくにベッドの中に潜りこんでいる時間だ。早紀は、ふわ、と声をあげて、あくびをしてしまった。

そして、ちょっと顔を赤らめる。

肩の上で切りそろえられた、やや褐色がかったさらさらの髪と、可愛らしい目鼻だち。平均より低めの身長と細い手足、そして特徴的な大きな瞳が、十六歳という年齢よりは、やや幼い印象を見るものに与える。

そんな、まだあどけなさを残す容姿に相応しく、化粧つけらしいものはない。アクセサリといえば、シンプルなデザインのヘアピンくらいのものだ。愛らしいデザインのピンク色のブラウスと赤のミニスカートが、よく似合っている。

兄の俊司と早紀は、ちょうど一回り、年が離れている。早紀は、この家の主である重蔵の後妻の座に収まった母、紀子の連れ子なのだ。

こんにちは、早紀ちゃん。

当時まだ六歳だった自分に、やさしくそう語り掛けてきた、学生服姿の俊司の顔を、早紀は未だに鮮明に憶えている。

それが、十年前。

初対面のその時から、早紀にとって、俊司は特別な存在だった。

美人ではあるが温かみの無い紀子と、権威主義のカタマリのような重蔵は、あからさまに、早紀を疎んじていた。使用人たちは、複雑な境遇の早紀を敬遠するかのよう、うやうやしくはあるが冷たい態度で接した。

上流階級の子が通う早紀の学校の級友たちも、早紀にはどこか距離を置いていた。再婚するまで、紀子と早紀は母子家庭だった。本当の父親の顔を知らない早紀を、良家のお嬢さんであるクラスメートは仮面のような微笑で差別するのだった。

その状況は、高校に進学した今もあまり変わらない。

そんな早紀にとって、兄である俊司は、数少ない味方だった。

何かあるたびに優しい言葉で慰めてくれた俊司に対する漠然とした想いが、いつしか、

純粹な思慕の念となったのは、ある意味で必然だったろう。

中学生の頃、「血のつながっていない兄妹なら結婚できる」ということを知ったとき、早紀は、踊りあがりたいほどの喜びを覚えた。

しかし、義父である重蔵は、俊司が大学を卒業するとすぐ、彼に結婚を勧めた。いや、それは勧めるという生易しいものではなく、半ば強迫であった。一刻も早く結婚し、自分が一代で築き上げた大手製薬会社の後継者を産め、と、唾を飛ばすようにして喚くのだ。

早紀は、その重蔵の言葉を聞くたびに、文字通り胸が張り裂けるような痛みを感じた。

そんな早紀の気持ちを知って知らずか、俊司は、ここ一年ばかり、奥多摩の方にある会社の研究所に入り浸りになっている。学者肌の俊司は、大学で生化学に関する優秀な成績を修め、会社の研究所でいくつものプロジェクトを指導しているのだ。

父親の重蔵に比べれば圧倒的に覇気に欠ける俊司だったが、持ち前の協調性と確かな知識で、彼は二十代半ばの若さで、会社の研究部門を掌握していた。重蔵だけは、そのことを認めようとはしなかったが。

今日は、そんな俊司が帰ってくる日だった。

「遅いなあ……」

早紀は、最近増えた独り言でそうつぶやいて、ぼふ、とベッドに身を投げ出した。

そして、中学校の入学祝に俊司にプレゼントされた、大きな羊のぬいぐるみを抱きしめる。

柔和な、そしてどこかとぼけた表情のそのぬいぐるみは、ちょっと兄に似てる、と早紀はいつも思った。

そのふわふわした胴体を抱きしめると、きゅうん、と胸が切なくなる。

しばらく、早紀はそのぬいぐるみにちまっとして形のいい鼻をうずめるようにして、目を閉じた。

次第に高まる切なさが、少しずつ、早紀のまだ幼い体の中で、別のものに変質していく。

「ン……」

早紀は、ミニスカートの裾から伸びた健康的な脚を、我知らずもじもじとすり合わせていた。

まだいかなる異物も受け入れたことのない未成熟なその部分が、甘く痺れるような感じになる。

(ダメ……おにいちゃん、帰ってくるのに……)

そう思いながら、ちら、と壁にかかった時計を見る。もう、日付が変わってだいぶ時間が経っていた。

(それとも……急なお仕事が入ったのかな……)

そんなことを考えながらも、早紀の体は、さらなる刺激を求めて、もぞもぞとうごめいしている。

いつしか、早紀は、今まで抱き締めていたぬいぐるみを、脚の間に挟むようにしていた。

(ヤダ……あたしってば……)

そうは思っても、官能の火が灯った体を鎮めるには、方法は一つしかない。早紀は、ぬいぐるみを両手でぐっと自らの恥ずかしい部分に押しつけた。

「はア……」

柔らかな布のかたまりが恥丘を圧迫する感覚に、かすかに喘ぎが漏れる。

もどかしいような、うずくような、淡い快感。

自らの体が、着々と牡を迎え入れる準備を完成させつつあることに思い至らないまま、少女は、次第に昂ぶっていく牝の本能に身を任せていく。

羊のぬいぐるみを脚の間に挟んだまま、早紀は、くにくにと丸いヒップを動かしていた。

薄いショーツの布越しに、熱を帯びたその部分を、ぬいぐるみにこすりつける。

未だ早紀は、浴室以外では、自らの秘部に触れたことはない。オナニーという概念を覚えただけの早紀にとって、それは、自らの慰める唯一の手段だった。

「はア……んん……んく……んんっ……」

じわっ、じわっと体内に満ちていく快感を自覚しながら、早紀は、そのピンク色の唇を噛んで、漏れ出る声を押し殺した。

その弓型の眉は、今は切なげにたわめられ、大きな両目は何かに耐えているかのようにきつく閉じられている。

(ショーツが……しみになっちゃうよ……)

頭の隅で、かすかな理性が、ぼんやりとそんなことを思ってる。しかしそれも、自らの浅ましい動きを止めるまではいたらない。

「っはア……ッ」

とうとう早紀は、あからさまな快感の喘ぎを漏らしてしまった。

「あんっ……んくっ……はう……くうん……」

まるで、主人に媚びる子犬のような声が、次々と半開きになった唇からあふれ出た。

時折、ひくん、ひくんと、背中に震えが走る様が、少女らしいエロスをかもし出している。

すでに早紀の腰は、リズムカルに動き、貪欲に青い快楽を貪っていた。

すり、すり、すり、すり……と、ショーツ越しにぬいぐるみの布地と摩擦する度に、ひりつくような快感が湧き起こり、その小柄な肢体をぞくぞくと震わせる。

(きもちイイ……きもちイイ……きもちイイよう……)

快感が高まるに従って、ますます切なさは増し、早紀は、胸が締め付けられるような感覚さえ覚えていた。

ふわふわのぬいぐるみを股間に押しつけ、脚でぎゅっと締め付けると、かすかに安心感に似た何かを感じる。

早紀は、その錯覚にすがるようにして、ますますその幼い自慰行為にのめりこんでいった。

(お兄ちゃん……)

禁断の言葉が、早紀の胸の中で響いた。

(お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……ッ！)

愛しい人のことを想うことで、快感と切なさが倍化していく。

(お兄ちゃん……きもちイイ……早紀、イヤらしいの……どうしよう……)

その言葉を、声にすることはできない。そんなことをすれば、自分の心は、弾け飛んでしまうのではないかと、早紀は真剣に考えている。

「ああッ！ あうッ！ ンくッ！ ひうッ！」

その代わりに、早紀の声はますます激しく、大胆なものになっていった。

まだ口にするのでできない想いが空けた穴を快感で埋めようと、少女はその白い肌に汗をにじませながら、覚えたばかりの絶頂まで、昇っていこうとする。

(お兄ちゃん……好き……ッ！)

そう叫ぶ代わりに、早紀は、短く高い悲鳴を上げていた。

「きゃうウッ！」

そして、慌てて両手で口元を押さえる。

「んッ！ んんンッ！ んうッ！ んんンー……ッ！！」

ぴくん、ぴくん、ぴくん……と、まだ幼さの残る体が、絶頂の余韻に何度も痙攣する。

「はぁ……あう……ン……ふー……っ……」

早紀は、呼吸することを思い出したかのように、長々とため息をついた。

(すご……かった……)

早紀は、軽く脚を開き、ベッドの上で細めの太の字になった。

その潤んだ瞳に、見慣れた天井が映る。

(あたし……どうしよう……すればするほど……すごくなる……)

もやがかかったような頭で、早紀は、ぼんやりとそんなことを考えた。

その時

ドアが、開いた。

「お兄ちゃん！」

がばっと体を起こし、早紀は叫んでいた。

ドアを開けたのは、俊司だった。

「久しぶりだね、早紀」

俊司は、いつものように、ラフなシャツとジーンズといういでたちで、優しい笑みをそのやや面長の顔に浮かべていた。そして、なぜか胸ポケットの中につながるイヤフォンを、その右の耳にはめている。

早紀は、自分の顔がかっと熱くなるのを自覚した。

「カ……カギ、かかってなかった？」

ようやく、力の鳴くような声で、ぼつぼつと喋りだす。

「でも……ひどいよ……ノックもなしに……」

「ごめんね、早紀」

そう言いながら、俊司は、ぬいぐるみを抱き締めてベッドの上に座っている早紀に近付いていく。

うつむいていた早紀が、すぐ近くに俊司の気配を感じ、はっと顔を上げた。

「合い鍵、作っておいたんだ」

「え……？」

「今日はね、早紀をさらいに来たんだよ」

「な……」

なに言ってるの？ と言おうとして半開きになった早紀の唇に、素早く俊司の唇が重なった。

「！」

驚く早紀の細い肩を、俊司が、意外なほど強い力でつかむ。

「ん！ ん！ ん！ んー！」

反射的にもがく早紀の小柄な体を難なく押さえながら、俊司は、眼鏡の奥の目を閉じて、早紀の口を味わった。

桜色の唇を軽く吸い、口の中に、舌を侵入させる。

そして、ちゅぴ、ちゅぴ……と軽く音をたてながら、口内への侵入を阻む歯を、舌でなぞった。

早紀は、大きな目を見開き、兄の口と舌による蹂躪に、呼吸さえ忘れていた。

ようやく、俊司は口を離した。細い唾液の糸が、一瞬、二人の唇をつなぐ。

「キスするのは、初めて？」

いつもと変わらない口調で俊司に訊かれ、素直に肯いてしまった後、早紀はますます頬を紅潮させた。

「ひ、ひどいよッ！ こ、こんな、むりやり……！」

ファーストキスを奪われたことより、何の前触れもなく口付けされたことに、早紀の胸に怒りに似た感情が湧き起こっている。

「イヤだった？」

「だって……お兄ちゃん、なんでこんなことするの？」

「言ったろ。僕は今夜、早紀をさらいに来たんだ」

「さ、さらうって……？」

茫然とする早紀の肩から手を離し、俊司は、胸ポケットに入っていた小さな機械を取り出した。

そして、イヤフォンのコードを抜き、スイッチを押す。

“ はア……んん……んく……んんっ…… ”

すこし変質した自分の声が、機械の小さなスピーカーから漏れ出る。

「な……？」

「そのぬいぐるみにね、盗聴器をしかけておいたんだよ」

「ええッ！」

早紀の驚きをよそに、その機械は、彼女の愛らしい喘ぎを再生し続ける。

“ あんっ……んくっ……はう……くうん…… ”

マイクがぬいぐるみの中に入っていたせいだろう。しゅっ、しゅっ、という布のこすれる音が、声に被さっている。間違いなく、“あのとき”の音だ。

自分自身の浅ましさを証を目の前にして、早紀は、言葉を失っていた。

憧れていた優しい兄が、自分をこんな目に遭わせるということが、とても信じられない。まるで、夢でも見ているような非現実感がある。

しかし、機械が再生している声は、間違いなく、ついさっきの自分の声だ。

「可愛い声だね、早紀」

「や……いやアーッ！」

とうとう早紀は、悲鳴をあげ、両手で耳を覆っていた。

“ ああッ！ あうッ！ ンくッ！ ひうッ！ ”

それでも、自分の声は聞こえてくる。

「もうイヤ！ バカッ！ お兄ちゃんのバカあ！」

早紀は、近くにあった羊のぬいぐるみを、おもいきり俊司めがけて投げつけた。

俊司が、それを易々とかわし、その動きのまま、早紀に迫る。

「きゃン！」

早紀は、悲鳴をあげていた。俊司が、早紀の体をベッドに押し倒したのだ。

すでにその手には、例の機械はない。ただ、早紀の細い両手首を、しっかりと左右の手でシーツに押さえつけている。

眼鏡の奥の俊司の瞳は、今まで早紀が見たことのない光を湛えていた。

「早紀……」

俊司が、いつになく真剣な口調で早紀のことを呼ぶ。

ぞく、となぜだかは知らないが、早紀の細い体に戦慄が走った。

「ずっと、お前を見ていたんだ……もう、離さないよ……」

「お、お兄ちゃん……」

早紀は、声を震わせながらそう言うだけで精いっぱいだ。

俊司の長身が、早紀の小柄な体に覆い被さる。

「あッ……！」

俊司の体重を全身で感じて、早紀は、思わず声をあげていた。

そんな早紀の首筋を、俊司の唇がなぞる。

「あっ……ダ、ダメ……ダメえ！」

そんな早紀の悲痛な言葉も、俊司の動きをとめることはできない。

俊司の脚が、早紀の細い脚を割り開き、腿が布越しに恥丘を圧迫する。

「ダメ……おねがい……お兄ちゃん、やめて……」

涙に濡れた声でそう訴えながら、早紀は、俊司の体の下で身悶えた。

ついさっき、自慰行為で絶頂を迎えたばかりの体の中で、再び、浅ましい牝の本能が鎌首をもたげつつある。

「あ……ダメ……んう……イヤ……イヤあ……」

早紀の声に、次第に、喘ぎが混じっていく。

俊司は、早紀の両手を、彼女の頭の上に持っていき、左手一本で押さえつけた。

そして、右手を早紀の左の胸に当てる。

「あア……」

膨らみかけの胸を優しくまさぐられ、早紀は、思わず熱い吐息を漏らしていた。

ブラのカップにこすれ、乳首が、だんだんと固く尖っていく。

「おねがい、おにいちゃん……もう……もう、やめてエ……」

ぼろぼろと早紀の瞳からこぼれる涙を、俊司は、唇でぬぐった。

そうしながら、左右の胸を交互にまさぐり、繊細な手つきで愛撫する。

布越しの刺激に、早紀は、びく、びく、と敏感に反応した。

(うそ……あたし、感じてる……感じちゃってる……)

自分自身の反応に戸惑いながらも、体が淫らにうねるのを止めることができない。

俊司は、そんな早紀の脚の間に、右手を潜りこませた。

「あう……ッ！」

布越しに、熱を帯びたその部分を触れられただけで、びくっ、と体が震えてしまう。

「熱く湿ってるよ、早紀……」

「イ、イヤ……」

顔を背ける早紀に、俊司は、くすりと笑いかけ、そして、ショーツの中に右手を差し入れた。

「あああッ！」

すでに、じっとりを愛液を分泌している肉の襞が、ぴったりと俊司の指先に吸いつく。

俊司は、その感触を楽しむように、くにくくと指で肉の花弁を弄んだ。

「ダ、ダメ……お兄ちゃん……そんなふうにしたらダメえ……！」

かつてない快感を感じながらも、早紀は、そう叫ぶ。

(こんなのヤダ……むりやりなんて……やだよ……)

好きな相手にレイプされつつある、という状況が、早紀の心を乱れさせる。

一方、俊司は、迷いのない動きで、早紀の幼い性感を煽っていった。

恥丘全体を手の平で包みこむようにして、熱い蜜をたたえたスリットに指を這わせる。

ほとんど生え揃っていない、繊細なヘアの感触が、妙に生々しい。

俊司は、早紀の陰唇を挟むようにして、指を細かく動かした。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」

初めて経験する直接の愛撫に、ひりつくような快感を感じながら、早紀は、短い喘ぎをあげ続けた。

早紀のそこが、新たに愛液を溢れさせ、俊司の指先をぬるぬると濡らしていく。

俊司は、その淫らなぬめりを、複雑な構造の秘部の隅々に塗りたくるように、指を動かした。

敏感な十六歳の肉壁は、その刺激にますます蜜を分泌してしまう。

そして、俊司の指先が、まだフードに覆われた肉の芽を優しく挟んだ。

「きゃううッ！」

まだ、自分でも触れたことのない過敏な器官をつままれ、早紀が高い声をあげる。

俊司は、はアはアと喘ぐ早紀の頬に唇を這わせながら、くりくりとその部分を弄んだ。

「あいッ！ ひッ！ ひああッ！ きゃッ！ きゃあああああッ！」

痛みと錯覚するような強烈な快感に弾かれるように、早紀の幼さを残す腰が跳ねる。

「だ……めッ！ ソ、ソコ……あうッ……ひ……きゃうううううッ！」

指先で、円を描くようにして自らが分泌した愛液を塗りつけられ、早紀は、ほとんど半狂乱になった。

そんな早紀の柔らかな唇を、俊司がキスで塞ぐ。

今度は、早紀の歯も、俊司の舌を拒もうとはしなかった。

俊司の舌が、早紀の舌に絡まり、口蓋をくすぐる。

「んむむむム～ッ！」

口の中も、まぎれもない性感帯だ。早紀は、くすぐったいような快感に、くぐもった声をあげる。

くいつ、と俊司の指先が、充血した早紀のクリトリスを優しく摘んだ。

「！！！！！！」

強い衝撃とともに、早紀のまぶたの裏で、白い光が弾けた。

びくびくびくッ！ とその小柄な肢体が、これまで感じたことのないような強烈な絶頂感に痙攣する。

(ア……ア……ア……ア……)

しぶくように溢れた愛液が、俊司の手を恥ずかしいほどに濡らしてしまったことに、早紀は気付いていない。

(あう……ン……)

視界が、ねっとりとした闇に包まれる。

早紀は、口をキスで塞がれたまま、くったりと気を失ってしまった。

気がつく、早紀は、車の助手席に座らされていた。

「あ……！」

両手に手錠がかけられ、足首にも、細い鎖でつながった足かせがはめられている。

「目が覚めたかい？ ……早紀はねぼすけさんだね」

運転席を見ると、ハンドルを操りながら、俊司がちらりところらに笑いかけてくる。

「これって……？」

早紀が腕を動かすと、じゃら、と鎖が音をたてた。

「ごめんね、早紀。痛かったら言うんだよ」

「……」

早紀は、黙り込んでしまった。兄の意図がどこにあるのか、未だによく分からないが、とにかく、本気であることは確かだ。

車は、見覚えがある。車種は知らないが、俊司の所有の、軽快そうなツードア車だ。

早紀は、きょろきょろと辺りを見まわした。夜中、というか、明け方に近いのだろう。車の通りはほとんどない。

「ここ、どこ……」

「東北道だよ。僕の研究所に向かっている」

「……え？ 研究所って、奥多摩でしょ……？」

「それは、会社の研究所さ」

俊司は、どこか悪戯っぽい表情で微笑んだ。

「僕の研究所はね、ずっと北の方にあるんだ」

早紀は、めまいを感じて、ぐったりとシートにもたれかかった。

「眠かったら、寝てていいんだよ」

そんな俊司の言葉が、どこか遠く聞こえる。

細い下弦の三日月が、ふと、視界の隅に見えた。

第二章

- 破戒 -

明るい朝日が差しこむベッドルーム。その部屋の中央に、シンプルだが趣味のいいデザインのダブルベッドが置いてある。

そのベッドに、シーツにくるまった二人の女が寝そべっていた。二人とも、シーツの下は全裸のようだ。

「ハヤミは、首尾よくやってるかしら？」

「心配してるの？ エイプリル」

そう呼ばれたのは、会議室で、俊司にバーネットと呼ばれていた赤毛の娘である。エイプリル・バーネット。未だ十代でありながら医学博士号を有している。そして、組織の中では、Lの右腕として知られていた。

「まあ、ちょっと心配かな。彼、男の割には、男臭くないもん」

「日本人だからかしら？」

「どうかしらね。……ルーシィは、心配じゃないの？」

エイプリルは、“L”を、ルーシィと呼んだ。

彼女の名は、ルーシィ・L。実のところ、組織の中で彼女の本当の姓を知らないものはいないのだが、皆、彼女を名前か、ただ単にLとだけ呼ぶ。L自身、彼女がかつて属していた一族を捨てているのだ。

「だいじょぶだと思うけど？」

「だって、こっちに来るには、飛行機か、船を使わなきゃいけないでしょ。人目があるわ」

「彼なら、うまくやるわよ。……でも、ちょっと楽しみね。彼の妹、けっこうキュートよ。写真見る？」

そう言って、Lは、ベッドの横のサイドボードから、一枚の写真を取り出した。

「あぶなっ！ まだ子供じゃない」

エイプリルが、どこかはしゃいだような声をあげる。

「これでもハイスクールに通ってるそうよ。それに、あなただって、あたしから見ればまだまだお子様なんだからね」

「全く、気が多んだから」

エイプリルは、Lの美貌に、まだ幼さを残す顔を寄せながら、冗談めかした口調で言った。

「妬いてるの？」

「さーあね」

くすっ、とエイプリルが笑う。そうすると、ますますその顔は幼くなる。

「安心しなさい。あたしはあの日本人と三角関係になるつもりはないんだから」

「ふふっ……。でも、ハヤミのワガママを許したってことは……このサキって子に、利用価値ありと思ってるんでしょ」

「あたし、そんなに悪人に見える？」

Lは、その美しい蒼い瞳を、妖しげにきらめかせた。

「悪女に見えるわ」

エイプリルが、笑みを含んだ声でそう答える。

「それは光栄ね」

そう言ってLは、エイプリルのウェーブのかかった赤毛に手を伸ばした。

そして、優しく髪を撫でながら、唇と唇の距離を縮めていく。

「ん……」

二人は、うっとり目を閉じ、口付けした。しなやかな舌が、口内で互いに絡み合う。

キスを続けながら、Lは、エイプリルを優美な動きで組み敷いた。

そして、ようやく唇を離す。

Lに真上から見下ろされながら、エイプリルは、ちろ、と舌先で唇を舐めた。

その表情はコケティッシュでありながらも、どこか淫らである。ヘイゼルの瞳が、うるうると潤んでいる。

「好きよ、エイプリル……」

Lは、そう囁きながら、エイプリルのしなやかな首筋に唇を這わせた。エイプリルの頬が、次第に薔薇色に染まっていく。

「ルーシィ……」

エイプリルは、Lの体に腕を回しながら、言った。

「なあに？」

「まだ、彼女のこと、忘れられないんでしょう？」

エイプリルの言葉に、Lの秀麗な眉が曇る。

「たとえ一瞬でもいいから、忘れさせてあげたい……」

エイプリルは、そう言って、下からLの肢体を抱き締めた。

「それは……無理よ……」

長い睫毛に縁どられたまぶたを閉じながら、Lは言った。

「私は決して忘れないし、あなたも、忘れさせることはできない……あなたは、彼女の代わりなんかじゃないんだから……」

そう言って、細い指先を、エイプリルの秘所に忍び込ませる。

ぴくん、とエイプリルの体が、震えた。

そこは、すでに熱く蜜をたたえ、ひくひくと物欲しげに息づいている。

Lは、濡れる靡粘膜に指をくぐらせ、くちゅくちゅと音がするほどにかきまわした。

「あうっ……ん……んくっ……」

エイプリルが、さらに強くLの体に回した腕に力を込める。

優しく、そして残酷にその部分をまさぐりながら、Lは、かつての恋人のことを思い出していた。

プラチナブロンドの髪を長く伸ばした、まるで人形のように美しく、可憐な少女。

神が創り賜うた芸術品とさえ思われた彼女との、短くも幸せだった日々。

もともと病弱だった彼女を、Lは、まるでたおやかな花を愛でるように大事にした。

ルーシィって、お日様みたいだね。

一族が所有するいくつもの企業をエネルギーに経営するLに、彼女はある日そう言った。

あたしみたいな弱虫はね、ルーシィの傍にいただけで、元気になれるの。

彼女の体を傷付けまいと、疼く欲望を無理に抑え付けていたLだったが、その言葉だけで、全てが報われるような気持ちになった。

しかし一族は、前途有望なLが、こともあろうに同性愛に耽っているという事実がマスコミに漏れるのを、病的に恐れた。

臆病な獣ほど残酷である。

一族は、Lの些細な失敗を“制裁”するという名目で、彼女を生贄にした。

そして彼女は、一族の息のかかった暴力組織によってかどわかされた。

1年半に及ぶ捜索の結果、Lが得たものは1本のビデオテープだった。

それには、何人もの男によって、下半身が血みどろになるまで陵辱され、Lの名を細い声で呼びながら息絶える恋人の姿が収められていた。

(ニナ……!)

「きゃうッ!」

エイプリルの高い悲鳴が、Lを苦痛に満ちた追想から連れ戻した。

「い、いたいよ、ルーシィ……」

「あ……ご、ごめん……」

無意識に、エイプリルの敏感な部分に、爪を立ててしまったらしい。Lは、普段の彼女からは信じられないような、うろたえた声をあげた。

「ごめん……ごめんね、エイプリル……」

幼い娘に謝る母親のような声を出しながら、Lは、エイプリルの白い体に口付けを繰り返す。

「あ……あたしこそ、ごめん……イヤなこと、思い出させちゃったんでしょ？」

「ううん……忘れることができないんだから、受けとめるしかないのよ」

エイプリルの、形のいい乳房に頬を寄せながら、Lは言った。エイプリルが、そんなLの豊かな金髪を、慰めるように撫でる。

「愛してるわ、ルーシィ……」

「あたしもよ、エイプリル……」

Lの均整のとれた体は、しだいに下にずれていき、そしてLの唇は、エイプリルの花園に到達した。

「あア……」

Lの息遣いを肉襞に感じ、エイプリルはうっとりため息を漏らす。

Lは、その細長い指でエイプリルのその部分を割り開き、唇を寄せた。

「うんッ……」

Lの舌先がちろちろと動いて、エイプリルの花弁をくすぐる。

エイプリルは、思わずLの顔を自らの秘部に押しつけていた。それに応えるように、Lは、いっそう大胆に舌を蠢かせる。

白く優美な二つの肉体が、互いに互いを求めて、純白のシーツの上で妖しくうねる。

いつしか二人は、それぞれの心の傷を舐め合うように、互いの秘所を口で愛撫していた。いわゆるシックスナインの体位である。

溢れ出る蜜さえ、どこか血の味に似ているような気がした。

エイプリルも、理不尽な暴力によって、愛する人を失っている。

エイプリルの父は、医師だった。エイプリル自身、父親よりも高潔かつ剛毅な開業医を見たことがなかったし、それは今も同じだ。

エイプリルの一家が住んでいた街では、女が暴力によって犯され、意に添わぬ子を身ごもるなどということは、珍しくもないことだった。そして彼女の父親は、そんな女性に対する墮胎処置を行っていたのである。

父は、信念によって生きていた。たとえそれが生まれかけた命を奪う行為であることは分かっている、あえて自らの手を血で汚したのだ。

しかし、ファンダメンタリストを名乗る想像力に欠けた狂信者たちは、父の所業を悪魔の業と断じた。そして、母や幼い弟もろとも、父と、住居を兼ねた医院を爆弾によって吹き飛ばしたのである。買い物に出かけていたエイプリルが無事だったのは、偶然でしかなかった。

今でもエイプリルは、燃え盛る我が家の前で茫然としていた時に、頬や額に感じた熱気を憶えている。

そして、二人は出会った。

出自も立場も性格も、何もかも違う二人であったが、その信ずるところは同じであり、目標は一つだった。

Lは資本を、エイプリルは知識を。

「ルーシィ……！」

「エイプリル……！」

二人が、同時にアクメを迎えた。

そして、びくびくと体を震わせる。

しばらくして、がっくりと、二人の体から力が抜けた。

人類そのものというあまりにも大きな敵を相手にしていながら、二人は、どこか無垢な表情で、絶頂感の中を漂うのだった。

その頃

喉の渴きを訴えた早紀に、俊司は、後部座席にある魔法瓶を指し示していた。

(おトイレ、行きたくなっちゃうかも……)

そう思いながら、結局我慢できず、早紀は熱いお茶を喉に流し込んだ。

すでに、車外は明るくなっている。九月の空は、夏休みの間の空より、どこか透明度が高い気がした。

ぼんやりと、早紀は外を眺めた。

思考が、まとまらない。

いや、それどころか、ますます頭の中がぐちゃぐちゃになっていくような、そんな感覚を覚える。

(アレ……？ あたし……なんでお兄ちゃんの車に乗ってるんだっけ……？)

次第に、記憶までが混乱していく。早紀は、何度かぱちぱちと目をしばたかせた。

その顔から、しばらく、表情が消える。

(ふしぎ……なんかヘン……よっぱらうって、こんなカンジなのかな……)

車がトンネルに入り、轟音が辺りを包んだ。

「！」

びくっ、と早紀の体が硬直する。

長い長い、オレンジ色の光に照らされた暗い道が続く。

そして、トンネルを抜けたとき、早紀は、ほーっとため息をついていた。

その表情は、いつにも増して幼い。まるで、あどけない幼女のような、警戒感のない顔である。

「薬が、効いたみたいだね」

しばらく車を走らせ、高速道路を降りた後、俊司は、にこやかな顔で言った。

「へ？」

早紀が、大きな目を丸くする。

「いや、なんでもないよ」

「ふーん。……これ、なに？」

そう言って早紀は、不思議そうな顔で、自分の手にはまっている手錠を見つめた。

「待ってて、今はずしてあげるから」

俊司は車を路肩に寄せた。そして、ポケットの中にあった鍵で手錠を外し、さらには足かせにまで手を伸ばす。

「きゃは、くすぐった~い」

早紀は、狭い車内で脚をまさぐられる感覚に、けらけらと邪気なく笑った。

ようやく俊司が全ての戒めを取り除く。

「じゃあ、このあとで、船に乗るよ」

「ふね？」

「カーフェリーだよ。車ごと乗る船さ」

言いながら、俊司は車を再発進させた。特にこれといった建物の無い辺鄙な通りの先に、港が現れる。

「ふわ~、おっきなふね~」

早紀は、童女そのままの声をあげて、窓に顔をひっつける。

「ちょっと降りるけど、おとなしくしてるんだよ」

「うん！」

駐車場に車を止め、乗船手続きに出て行く俊司に、早紀は元気よく肯いた。

「おにいちゃん.....おトイレ.....」

ちょっとしたホテルの一室を思わせる特等船室に入るなり、早紀は恥ずかしそうに言った。

「入り口のすぐ近くだよ。自分でできる？」

「できるもん！」

ぷー、と頬を膨らませて早紀は言い、トイレの中に入っていく。

俊司は、苦笑いして、窓際のソファーに腰掛けた。窓の外はフェリーの進行方向だ。

地図の上では狭い海峡でも、窓からの眺めは広々としている。

太陽の光を反射して、きらきらと光る海面を見ながら、俊司は目を細めていた。

「お兄ちゃんと旅行できるなんて、夢みたい」

いつのまにか俊司の後ろに立っていた早紀が、そう言った。

「手、洗ったかい？」

「あらったも~ん」

にへへ、といった感じで笑って、早紀は俊司の首に抱きついた。

「く、苦しいよ」

俊司が、苦笑いしながら言う。

「ねえねえ、これから、どこ行くんだっけ？」

「北海道だよ」

「ほっかいどお！ すっごーい」

早紀は、そう言ってぴょんぴょんと部屋中を跳ねまわった。

「あんまりうるさくしちゃダメだよ、早紀」

たしなめるように俊司が言うと、ぴた、と早紀は動きを止めた。

その顔が、心配そうな表情を浮かべている。

「おにいちゃん、おこってる？」

ちょっと泣きそうな声で、早紀が言った。

「え？ いや、怒ってはいないけど……どうして？」

そう言って、俊司は眼鏡の奥の目を丸くした。

「だって、いつもより、ちょっとこわい感じだし……早紀のこと、早紀って呼ぶし……」

数秒かけて、早紀の言わんとしていることを理解した俊司は、ソファから立ちあがってにっこりと微笑んだ。

「怒ってないよ、早紀ちゃん」

「わーい」

早紀は、嬉しそうにそう言いながら、ぴょおん、とベッドにその身を横たえた。

「えへへー……」

そして、枕をぎゅうっと抱き締める。

「なんだか、ねむくなっちゃったあ……」

「着いたら起こしてあげるから、寝てていいよ」

俊司が、優しく言う。

「ホント？ 早紀のこと、置いてっちゃだよ」

「置いてくなんてことはしないよ。……絶対にね」

ベッドに横たわる妹の顔を覗きこむようにしながら、俊司が言う。

「ホント？」

「本当だよ、早紀ちゃん。だから、おやすみなさい」

「おやすみなさい……」

早紀は、安心したように微笑み、そして、素直に目を閉じた。

くうくうという可愛らしい寝息を聞きながら、俊司は、一瞬だけ、悲痛な表情を浮かべる。

そして、何かを吹っ切るように、再び窓の外を眺めた。

早紀は、甘たるい夢の中にいた。

俊司に思いきり甘えながら、北の大地へと旅行する夢だ。

しっかりしない足取りで、危なっかしく車に乗りこみ、発進する。少し走ると、周囲の風景が広々と開け、空の色まで違うような気がした。

早紀は、車の中で、何度かまどろみ、そして、少しだけ目を覚ましては、また眠った。

次第に、その夢が覚めていく。

まるで種のある人工甘味料のような、甘たるく、そしてかすかに苦いような夢……。

いや、それは夢ではなかった。

「……あ！」

早紀は、思わず声をあげていた。

運転席の俊司が、ちら、と視線をよこす。

車は、ゆるやかに連なった緑の丘の上を伸びる道を走っていた。無論、早紀には、ここが正確にどこなのか分からない。

そして、先の両手両足は、再び手錠と足かせによって戒められていた。

「お兄ちゃん……」

「もうすぐ着くよ、早紀」

茫然と呼びかける早紀に、俊司は、いつも通りの穏やかな声で応えた。

「ごめんね。頭、痛くない？」

「い……痛くは、ないけど……何か、薬使ったの？」

「うん。早紀が、船の中で騒いだりしたら、困るだろう？」

「……」

早紀は、じっと俊司の顔を見つめた。すでに空は暮れなずみ、次第に俊司の顔を影が覆っていく。

そして、夜になった。暗い空の下、俊司の運転する車は、ほとんど他に車のない道を進み続ける。

早紀は、何も話さなかった。薬の後遺症なのか、体が重く、頭に膜がかかったようだ。

夢から覚めたはずなのに、一向に現実感が湧かない。

そして、車は、丘の中にある敷地に滑りこんだ。牧場を思わせる景色の奥に、場違いな四角い建物が横たわっている。何かの研究施設のようだ。

俊司の車は、その建物の地下にある駐車場に入り込む。

「ここが、僕の研究所だよ」

目を丸くして不安げに辺りを見回す早紀に、俊司が言った。

「お、お兄ちゃん……」

早紀は、怯えたような声で言った。

「何？」

「お、下ろして……自分で、歩けるから……」

「だーめ」

くすくすと笑いながら、俊司が言う。

研究所の中の、白い廊下を、俊司は、早紀を胸に抱えて歩いていた。肩と膝の裏に腕を回す、いわゆる“お姫様だっこ”の姿勢である。

「足に鎖が付いてるんだもん、歩きにくいだよ」

「それは……お兄ちゃんが付けたんじゃない！」

「だから、責任もって運んであげるよ」

「……」

早紀は、赤くなった顔を、ぷい、と背けた。

「他の人に見られたら、ヘンに思われちゃうよ……」

俊司の顔を見ないようにしながら、早紀が言う。

そんな早紀のセリフが呼び寄せたように、二人は、廊下の角で、ぱったりと“他の人”に出会ってしまった。

「やだッ！」

早紀は、ますます顔を赤らめながら、うつむいた。

「しよ、所長……えっと、今お帰りですか？」

その声は、早紀よりもまだ幼いのではないかと思えるような、少女の声だった。

「うん。コダマくんは、今日は徹夜かい？」

「もうすぐ、上がりです」

そう言う少女の方を、早紀は、ちら、と盗み見た。小柄な早紀よりも小さな体で、だぶだぶの白衣を着ている。人の好きそうな童顔に丸いレンズの大きな眼鏡かけ、三つ編みのお下げが二本。胸の名札には“児玉くるみ”と、日本語とアルファベットで印刷されていた。

「じゃあ、あまり無理しないでね」

「は、はい……」

困ったような顔で二人を交互に見つめるその少女に、俊司は何でもなさそうに言って、その場を去った。

「い、今の人……」

しばらくして、早紀がおずおずと言う。

「ああ、彼女？ ああ見えても、もう大学生なんだよ。優秀なスタッフだよ」

俊司は、早紀を床に下ろし、廊下に並ぶドアの一つをカードキーで開けながら、言った。

「さ、ここが早紀の部屋だ」

そう言って、早紀を、部屋の中に案内する。

そこは、ワンルームマンションの一室のような部屋だった。

入口のすぐ右手には、トイレと、バスルームに続くらしいドアが別々にあり、奥は、フロアリングの部屋につながっている。

早紀は、足かせがはまったままの状態、部屋の中に入りこんだ。広々とした部屋には、大きなベッドとミニキッチンが備えられている。そして、窓は頑丈そうな二重サッシで、カギがなければ開けないようになっていた。

「早紀……」

茫然とする早紀に、俊司が言った。

「お風呂、一緒に入ろう」

「え……？」

早紀は、大きな目を丸くして、俊司に向き直った。

「い、いっしょになって……」

「言った通りの意味だよ」

俊司が、ゆっくりと早紀に近付いていく。

早紀は、無意識に後ずさっていた、背中に、壁が当たる。

「いやかい？」

「だ、だって……」

「薬で素直にしてから、そうすることもできるんだよ」

きらり、と俊司の眼鏡が、蛍光灯の無機質な光を反射する。

「でも、そんなのは、早紀だってイヤだろう？」

確かに、俊司は、薬品によって早紀の理性を奪うことができる。既に一度、早紀はそれを経験しているのだ。

早紀は、自分の体が、一番辛い形で、兄に奪われつつあるということを、認めざるをえなかった。

それでも、何も分からない状態で、俊司と関係を持ちたくない。

早紀は、細かく体を震わせながら、こっくりと俊司に肯きかけていた。

バスタブは、合成樹脂製ではあったが、二人が入っても充分なくらいに大きかった。

その中で、早紀は、俊司の脚の間に収まるような形で、湯に浸かっている。

俊司が、後から早紀を抱くような姿勢だ。

「あ……ん……んく……あうッ……」

早紀は、頬を紅潮させながら、必死で喘ぎを噛み殺していた。

俊司が、背後から手を回し、早紀の胸をゆるゆると揉みしだいているのだ。

さすがに足かせは外されているが、早紀の両手には、まだ手錠がかけられている。俊司に丁寧に服を脱がされた後、またかけ直されたのだ。

早紀は、その両手をそろえるような姿勢で口元に持っていき、右の人差し指を噛んだ。

その眉は切なげにたわめられ、長いまつげが震えている。

「気持ちいいかい？ 早紀……」

そう言いながら、俊司は、ぼおっと桜色に染まった早紀の首筋に、ちゅっ、とキスをした。

「んく……」

早紀は、指を噛んだまま答えない。もし口を開けば、本当のことを言ってしまうそうだった。

(うん……気持ちいいよ、お兄ちゃん……)

その言葉を、言うことはできない。早紀は、快感とともに切なさに耐えながら、指を噛

み続けた。

俊司は、左手で胸への愛撫を続けながら、右手を、早紀の下腹部へと滑らせた。

「ひゃうッ！」

思わず、早紀は叫んでしまった。赤く歯の跡の残る指が、口から離れる。

俊司の長い指が、早紀の恥ずかしい部分に潜りこんだのだ。

すでに熱を帯びているその部分を、俊司の指先が、優しくこすりあげる。

「あっ、あっ、あっ、あっ……」

早紀は、うろたえたような声をあげながら、俊司の腕の中で身をよじった。

「敏感だね、早紀は……」

くすくすと笑いながら、俊司は、愛撫を中断して早紀の体を抱えあげた。

「きゃッ！」

ざばあっ、という湯が流れる音に、早紀の悲鳴が重なる。

俊司は、早紀を丁寧に風呂場用のイスに座らせた。そして、自身はバスマットのの上に膝立ちになって、またも後から早紀を抱き締める。

「ああ……」

耳たぶに、俊司の熱い吐息を感じ、早紀はぞくぞくと背中を震わせてしまう。

しばらくそうした後、俊司は、名残惜しげに早紀のすべすべの背中から体を離し、ボディソープの容器を手にした。

そして、ねっとりとしたピンク色の液体を、早紀の体に垂らす。

ボディソープの冷たさに、びくっ、と早紀の体が反応した。

そんな早紀の瑞々しい肢体を愛でるように、俊司が、ボディソープを伸ばしていく。

「あ……く、くすぐったいよ、お兄ちゃん……ふうん……」

イスの上で、きゅっ、と体を縮める早紀の肌を、ぬるぬると俊司の手の平がまさぐる。

「あ、ダメ……あうん……ん……んん……んくう……」

早紀のしなやかな体が、次第に純白の泡に包まれていく。

俊司は、まるで体全体で早紀を洗おうとするかのように、その胸を早紀の背中に押しつけ、動かした。

俊司の両手は、再び早紀の胸の膨らみを捕らえている。

「きゃうん！」

早紀が、子犬のような声をあげて身悶えた。俊司の指先が、早紀のピンク色の乳首をつまんだのだ。

ボディソープのぬめりを利用して、俊司の指先が、早紀の小粒の乳首をしごくようにする。

「あッ！ あんんッ！ ダメ！ おにいちゃん、それダメえ！」

ひりつくような快感に頭の中を真っ白にしなが、早紀が叫ぶ。

しかし俊司は、ますます激しく早紀の乳首を愛撫しながら、その髪の中に鼻をうずめた。

そして、うっとり目を閉じながら、かすかに汗ばんだ早紀の匂いを吸いこむ。

いつしか、俊司は、隆々と反り返ったそれを、早紀の腰に押しつけていた。

「あッ……！」

その熱さに、早紀は、胸の快感すら一瞬忘れて、息を飲む。

「早紀……」

俊司が、囁くような声で言った。言いながら、右手を、早紀の大事な部分へと伸ばす

「続きは、ベッドですよ……」

そう言うとともに、早紀の一番敏感な部分を、きゅっ、と残酷につまんだ。

「あうっッ！」

俊司の不意打ちに、早紀は、軽い絶頂へたやすく押し上げられてしまった。

手錠を外されないまま、早紀は、体を丁寧に拭かれて、ベッドに横たえられた。

「お兄ちゃん……」

震える声で、自分に覆い被さる俊司に、呼びかける。

せめて、手錠は外してほしいと思ったが、それ以上は言葉にならない。

早紀は、戒められた両手で胸をかばうようにしながら、俊司の顔を下から見つめた。

眼鏡を外した俊司の顔は、いつもよりずっと凛々しくなる、と早紀はいつも思う。

普段の、眼鏡をかけたとぼけた兄の顔も好きだったが、たまに眼鏡を外した俊司の顔は、もっと好きだった。

その、大好きな兄の顔が、真剣な表情で、自分の裸体を凝視している。

「綺麗だよ、早紀……」

そう言われると、嬉しくて、切なくて、涙がこぼれる。

どうしてこの優しい兄は、自分の意思を無視するようにして、自分の純潔を奪おうとするのだろう。

次々と溢れる涙を、俊司が、唇でぬぐった。

「早紀、いくよ……」

そんな優しい俊司の言葉が、早紀の心の中の恐怖を呼び覚ます。

「イ、イヤ……お兄ちゃん、やめて……！」

しかし俊司は、意外なほどの力で早紀の長い足を割り開いた。

「ひあ……」

兇暴なまでに反り返った赤黒い牡器官が、早紀の恥ずかしい部分に触れる。

「お、おねがい！ お兄ちゃん！ やめて！ やめてよお！」

このまま、無理やりにされたら 兄を、嫌いになってしまうかもしれない。

そんな妹の悲痛な叫びに、むしろ誘われるように、俊司は、腰を進ませた。

「やあ……」

熱を帯びた異物が体内に侵入してくる圧倒的な感覚に、早紀は、うめくような声をあげ

る。

しかし、俊司の前進は止まらない。

熱くたぎる俊司のペニスに、早紀の、純潔の証が当たった。

俊司が、上気した顔に、一瞬だけ、辛そうな表情を浮かべ、そして、一気にそれを貫く。

「あ　　！」

破瓜の激痛に、視界が真紅に染まった。

「イヤああああああああああああああああああああああアアアアーッ！」

血を吐くような叫びをあげ、早紀は、その華奢な体を弓なりに反らせた。

しかし俊司は、何かに耐えるように歯を食いしばりながら、さらに腰を進ませていく。

「いたい……い……いあ……あ……ヤ……イヤああああ……！」

兄の剛直が、妹の処女血にまみれながら、その靡肉をえぐる。

早紀は、ふるふるとかぶりを振りながら、涙を流し続けた。

俊司のペニスが、早紀の中で動いている。その抽送によってもたらされる痛みが、早紀の全身を貫き、心を引き裂いていった。

「イヤ……イヤ……イヤ……イヤ……イヤ……」

早紀は、力なくそう繰り返しながら、俊司の仕打ちにひくひくと体を震わせた。

痛みが、次第に、燃えるような熱となって、早紀の下半身を焼いていく。

「早紀……早紀……っ！」

俊司の声が、聞こえる。

「おにいちゃん……たすけて……あついの……あついよお……」

早紀は、頭を混乱させながら、必死に俊司に助けを求めた。

全身の神経が焼き切れてしまいそうな、かつてない感覚。

「早紀……ッ！」

その叫びとともに、早紀は、ぎゅっ、と俊司に抱き締められた。

「おにいちゃんッ！」

早紀も、思わず叫んでいた。

早紀の体内で、一際熱い何かが弾ける。

その瞬間、混乱を極めていた早紀の頭の中を、一筋の光が貫いた。

(おにいちゃんがあたしのナカでシャセイしてる……！)

目のくらむようなその感覚は、しかし、間違いなく快感だった。

「ンああああああああああああああああああああああアアアアーッ！」

早紀は、無意識のうちに、その両脚を俊司の腰に絡めていた。

びくっ、びくっ、と、体内で、俊司の分身が力強く痙攣し、大量の精を放ち続けている。

その生々しい感触も、処女肉を蹂躪された痛みも、全て溶け合い、凄まじい快美感とな

って、早紀の心と体を打ちのめし、圧倒していた。

「あああ……ンあ……あ……あア……」

そして、どこまでもどこまでも暗い闇の中を墮ちていくような浮遊感。

がっくりと、早紀の体から、力が抜けた。

そんな早紀の体の上に、全ての力を使い果たしたように、俊司も横たわる。

血と精と愛液にまみれた俊司のペニスが、ぬるり、と早紀の膣内から押し戻された。

無残に充血したその部分から、血に混じってピンク色になった精液が溢れ出る。

重なり合った二つの体は、静寂が満ちた部屋の中で、しばらく動かなかった。

「おにいちゃん……どうしよう……どうするの……？」

あの後、もう一度一緒にシャワーを浴びた後、二人は同じベッドに横たわった。

早紀の手を戒めていた手錠は、今は外されている。

早紀は、自分でも戸惑うほど、落ち着いていた。俊司を全く恨んでいないと言えば嘘になるが、それでもその気持ちは驚くほどに希薄だ。

(やっぱりあたし……お兄ちゃんが……好きなんだ……)

もはや、告白するタイミングを完全に逸してしまったその想いが、確かに早紀の胸の中にある。

それでも、兄と肉体関係を持ってしまったという罪悪感はぬぐえない。

「血はつながってなくても……兄妹なんだよ」

なじるような口調で、枕を並べる兄に言う。

「違うよ、早紀……」

「ちがう？」

俊司の意外な言葉に、早紀は、思わず聞き返す。

そんな早紀の顔を、俊司は、じっと見つめ、言った。

「血は、つながっているんだよ。早紀……」

早紀は、俊司のこんなに哀しい声を、今まで聞いたことがなかった。

第三章

- 陵辱 -

「ウィルス進化論は、イマニシ進化論の弱点　すなわち、一種の形而上性を説明するための学説だという主張だが、私はむしろ、ダーウィニズムそのものの大いなる躍進だと思うね」

血色のいい小太りの東洋人は、にこやかな笑顔を浮かべたまま、そう語った。

相手に合わせて日本語を喋っているが、中国人である。甘逸文。専攻は統計生物学。この研究所内では、MWV解放後のマクロ・シミュレーションを担当している。

「まあ、そもそもが“進化”という言葉自体が、ダーウィニズムに対する誤解を生んでいるがね。別に、生物のこの大いなる歴史に、定まった進路や終着点があるわけではない。ただ、変化が必然的に発生し、その変化を、冷徹なる大自然が選択していく……。進化論の本質は、実は残酷なまでに単純だ。そこには、希望も願望もなく、神意も倫理も存在しない。ウィルスも、進化の本質ではなく、言わば意志を持たない裏方のようなものだ」

その、甘博士の話を、彼の研究室で熱心に聞いているのも、東洋人である。まだ幼い容貌の日本人、児玉くるみだ。

「でも、今回のMWVは、ヒトの意思によるものではないのですか？　それも、一部の人間の」

「無論、そうだ。確かに今までの生物の歴史の中で、意志が進化を左右した例は無いとされている。だからと言って、MWVによってもたらされるそれを、進化でないと断ずることはできないと思うね」

「でも　人類は、滅びるのでしょうか？」

「ホモ・サピエンスという、傲慢で可憐な霊長類は、おそらく絶滅する」

研究室よりも、中華料理屋の厨房にいるほうが似合いそうなその顔に、満面の笑みを浮かべながら、甘博士は続けた。

「しかし、もはや進化という大河を流れるのは、遺伝子だけではない。ドーキンスやハンフリーの“ミーム”という言葉は、何と訳されていたかな……？」

「模倣子、ですか？」

熱心にメモをとりながら、くるみが言う。

「そう、それだ。彼らが言うところの、楽曲や思想、標語、衣服の洋式、壺の作り方、アーチの建造法などの情報は、その模倣子に託され、我等が後継者に継承される。……瞳や髪や肌の色、血液型や持病の有無などよりも、もっと重要な情報がね」

「後継者　」

「それ以上は、私の専門じゃない。イェルマク博士に質問するのが妥当だと思うよ」

「あたし……あの方、苦手で」

ぺろ、とくるみは、ピンク色の舌を出して見せた。
「彼を苦手としない人間はいないよ。そして博士も、人間を大の苦手としている」
甘博士は、オーバーな仕草で、両手を広げて見せた。
「だが、博士は子煩悩な優しいおじさんだよ。シリコンでできた自分の子供たちを、彼ほど愛してやまない男はいない」
くるみは、ちょっと困ったような顔で、曖昧に肯いた。

早紀は、部屋の中で、一人、混乱していた。
俊司の言葉が、耳から離れない。
血は、つながっているんだよ。
(どういう……ことだろう……？)
あの後いくら訊いても、それ以上、俊司は話してくれなかった。
無論、意味するところは理解できる。そして、母である紀子と、俊司の年齢差を考えるなら、二人は、腹違いの兄妹である、と考えるのが妥当なようだ。
(もし、お兄ちゃんの言うことが本当だったら……)
早紀は、義父であると思っていた重蔵が、紀子に生ませた子供であるということになる。
つまり、いない者とすでに諦めていた実の父親と、ずっと一緒に暮らしていた、ということになるわけだ。
しかし、少しも嬉しいと思えない。
重蔵の態度は、早紀にとって冷たすぎた。いや、ほとんど無視しているといってもいい。
いっそ、俊司の言葉が、嘘か、何かの間違いであってくれればと思う。
(そうすれば、お兄ちゃんとも、結婚できる……)
しかし、俊司の口調は、その言葉が真実であることを信じさせるに十分なものだった。
(ケッコン……)
胸に抱いていたその想いが、淡い雪のように消えてしまったような気がする。
「学校、どうしよう……」
早紀は、ぼんやりと呟いた。
特に親しい友人がいるわけではないし、行きたいという気持ちがあるわけではない。ただ、学校という日常から強制的に切り離されていることが、気にならないわけがない。
それでも、どうすることもできない。そのことを言い訳に、早紀は、学校のことを考えるのをやめた。
「ヒマ……だなあ……」
午前中一杯寝てしまったせいで、もう昼下がりがだ。とりあえず、TVの電源を入れる。
しかし、TVはアンテナとつながっていないらしい。早紀は、TVと一体になっている

ビデオのスイッチを押した。

「な……！」

早紀は、絶句していた。

「なに、コレえ……」

TV画面に映し出されたのは、絡み合う二人の男女の映像だった。

女は、まだ少女といってもいいような年齢だ。そのいたいけな体は麻縄で緊縛され、目にはアイマスクがかけられている。そのせいで人相はよく分からないが、早紀と同じくらい、もっと下の年に見える。

その少女は、幼児体型に似合わない豊かな胸をゆすりながら、仁王立ちしている男の股間に、顔をうずめるようにしていた。

その部分に、モザイクはかかっていない。あどけない少女が、口と舌で赤黒い男根に奉仕している姿が、はっきりと映っている。

さすがにフェラチオという言葉くらいは聞いたことがあるが、実際に見るのは初めてだった。早紀は、その淫らな口唇愛撫の映像から、目を離すことが出来ない。

「ヤダ……こんな……すごいエッチ……」

知らず知らずのうちに、早紀は、自分の唇に、指を触れさせていた。

画面の中の男の性器に、昨夜、自分の処女を散らした兄のそれがダブる。

いつしか、画面の中の少女は、逞しく反り返った男のそれを、その小さな口に収めていた。

そして、ペットが主人に媚びるような鼻声をもらしながら、頭を前後させる。両脇で結んだ長い髪が、その度にゆらゆらと揺れた。

「あ、あ、あ……」

早紀は、ぺたん、とベッドに腰を落とし、茫然とその画面に見入っている。

男が、少女の髪をつかみ、自らも乱暴に腰を動かして、その可憐な口を犯した。

両手を後手に緊縛された少女は、その仕打ちに抵抗することが出来ない。いや、もしその体が自由であっても、抗うことなどしないのではないかと思われるほど、少女のくぐもった声は被虐の悦びに濡れている。

「！」

画面の中の男が、フィニッシュを迎えた。

荒い呼吸を繰り返しながら、男が、少女の口腔に、熱い精を注いでいる。

「……あ……ヤ、ヤダ……っ！」

早紀は、自分がじっとりとショーツを濡らしてしまったことに気付いた。

「お兄ちゃん！」

部屋に入るなり、いきなり強い口調でそう言われて、俊司はきょとんと目を見開いた。

夜。窓の外は、すでに闇に包まれている。ちょうど早紀は、あのくるみという名前の所

員が持ってきた食事を平らげたばかりだった。

「な、何よ、あのビデオはぁ！」

見ると、早紀が真っ赤になりながら、そんなことを言っている。

俊司は、自分のペースを取り戻し、くす、と笑った。

「見たんだね、あのビデオ」

「だって……ラックの中、エッチなビデオばかりじゃない！」

「全部、確かめたの？」

「ぜ、全部じゃ、ないけど……」

ごにょごにょと、早紀は言葉を濁した。

「あれはね、早紀の勉強用だよ」

「べ、べんきょう？」

俊司の意外な言葉を、早紀はオウム返しに繰り返す。

「そう。早紀はもう、学校に行かなくていいんだ。今日から……いや、昨日から、僕のためだけに勉強すればいいんだよ」

そう言って、俊司は、早紀の目の前に立った。

「お兄ちゃんの、ため？」

「そうだよ、早紀」

「あ……！」

何か言いかける早紀の唇を、俊司がキスで塞ぐ。

「ん！ んんッ！ んーッ！」

俊司の舌が早紀の舌に絡み付き、口の中を愛撫する。

しばらく、俊司の腕の中で抵抗していた早紀の体が、くた、と弛緩した。

そうなってからも、しばらく早紀の口腔の感触を楽しんだ後、俊司はようやく口を離れた。

「だ……だめだよ、お兄ちゃん……血が、つながってるんでしょ……？」

はぁはぁと小さく喘ぎ、涙で瞳を潤ませながら、早紀が言う。

「そうだね、いけないことだね、これは……」

俊司は、哀しげにそう言った。その言葉に、早紀の胸がきゅうんと痛む。

(ちがう……こんなコト言いたいんじゃない……あたし……)

「早紀……服を脱いで」

「えっ？」

「脱いで」

いつにない強い口調で、俊司が繰り返す。

「お、お兄ちゃん……」

すがるような目で、早紀は俊司を見る。しかし、俊司の表情は動かない。

早紀は、指先を震わせながら、ブラウスのボタンを外していった。

そして、スカートを脱ぎ、ブラとショーツだけの姿になる。

「下着もだよ、早紀」

「……」

シンプルなデザインのブラを外し、胸の膨らみを左の腕で隠しながら、ショーツを下ろす。

そして、早紀は全裸になった。

その早紀の体を、俊司がぎゅっと抱き締める。

「あ……」

早紀は、思わず声を漏らしていた。

俊司に濃厚なキスをされて、あのビデオを見て以来体の奥底でくすぶっていた官能に、再び火が灯っている。

じゅん、と早紀の秘部が、恥ずかしい蜜をにじませていた。

俊司は、早紀のその部分に、右手を触れさせる。

「あ、イヤ……」

「濡れてるよ、早紀。……いけないコだね」

そう、早紀の可愛らしい耳たぶに囁く。

「そ、そんな……」

「お仕置きを、しなくちゃいけないね。……縛るよ」

「えっ！」

俊司の思いがけない言葉に、早紀は、うつむかせていた顔をはっと上げ、体を離れた。

俊司が、その左手に、白衣の懐から出したらしい赤いロープを握っている。

「うそ！ やめて！ お兄ちゃん、そんなのやめてェ！」

悲痛な声をあげて逃げようとする早紀の体を引き寄せ、俊司は、その細い両手首に縄を巻きつけた。

「きゃうッ！」

腕を捻り上げられ、手首にロープを食い込まされる痛みに、早紀は思わず声をあげてしまう。

俊司は、その瞳に、普段の彼からは考えられないような強い光を宿らせながら、くるくると早紀の後手になった腕にロープを巻き付けていく。

「い、いたいよ……お兄ちゃん、乱暴にしないで……」

早紀は、泣き声でそう訴えた

「じゃあ、抵抗しちゃだめだよ」

「そ、そんなぁ……」

そう言いながらも、早紀は、抗うのをやめていた。

(なんで？ なんで、こんなこと……？ どうして……？)

緊縛による苦痛よりも、優しいはずの兄の理不尽な行為に、涙があふれてしまう。

俊司は、ロープでしっかりと早紀の腕を後手に拘束すると、次は、乳房の上下に縄を走らせた。発達途上の胸の膨らみが、無残に歪み、突き出される。

さらに俊司は、自由を奪われた哀れな妹の体を淫らにまさぐり、その股間に再び右手を差し入れた。

「あく……」

早紀の意志とは無関係に、その部分は、なぜかいつそう潤い、熱い蜜で兄の手を濡らしてしまう。

(うそ……ど、どうして……？ あたし……あたし……)

苦痛をもたらされているはずなのに、体は熱く火照り、淫らな反応を返している。そのことに、早紀は混乱しきっていた。

(あたし……ヘンタイなの……？ それとも……お兄ちゃんが、することだから……？)

無論、答えなど出るわけもない。ただ、まるで、俊司の手を迎え入れようとするかのよように、勝手に腰が動いてしまう。

俊司は、そんな早紀の脚の間にまでロープを通し、昨夜純潔を失ったばかりの秘裂に、残酷にロープを食い込ませた。

「きゃううッ！」

たまらず早紀は声をあげ、体を反らしてしまう。構わず、俊司は、早紀の股間にかけてられた縄を、腕を戒める縄と、乳房の下の縄とに固定していく。

緊縛が終わると、早紀は、脱力したように床に膝をついてしまった。

「はア、はア、はア、はア、はア……」

「縛られて感じてるのかい？ 早紀……」

俊司が、着ているものを脱ぎ捨てながら、言った。

「そんな……そんなこと……ないよお……」

そう答えながらも、早紀の喘ぎは、どこか甘く濡れている。

そんな早紀の目の前に、俊司は、ぬっ、とその剛直を突き出した。

「きゃっ！」

早紀が、可愛らしい悲鳴をあげ、目をそむける。

「……ビデオで見た通り、してごらん」

そう言いながら、俊司は、早紀のまだあどけない顔に、すでに反り返るようにして勃起しているペニスを近付けた。

「あ……！」

柔らかな頬に触れたその、意外なほどの硬度と温度に、早紀は思わず声をあげていた。

そして、おずおずと視線をそれに向ける。

(すごい……男の人のって、こんななんだ……ひくひく、動いてる……)

つい、好奇心に負けて、しばしそれに見いってしまう。何しろ昨夜は、じっと観察する余裕などなかったのだ。

「早紀……」

俊司の声に、早紀は、はっと顔を上げた。

「早紀は、僕に縛られて、無理やりさせられるんだ。だから、早紀は悪くないんだよ……」

「お兄ちゃん……」

「罪は、全て僕にある。だから、ね……」

そう言って、俊司は、優しく早紀の髪を撫でた。

「う、うん……」

早紀は肯いて、震える舌をそっと俊司のそれに伸ばした。

そして、まるで味見するかのように、ちろっ、と舌の先端で、亀頭の裏側を舐め上げる。

「んっ……」

俊司は、うめくような声をあげて、びくっ、と体を震わせた。

「気持ちいいの？ お兄ちゃん……」

「うん……だから、もっと続けて……」

早紀は、返事をする代わりに、上目遣いに兄の顔を見ながら、ちろっ、ちろっ、と舌をシャフトに這わせる。

「あ、ああ……」

俊司は、声を漏らしながら、早紀の髪を撫で続けた。

そうされると、なぜか嬉しくなって、早紀はよりいっそう熱心に舌を使い出す。

(ビデオだと、あのコ、どうしてたっけ……?)

そう思いながら、早紀は、自らの唾液で俊司のペニスを濡らしていった。

(そうだ……先っぽのほう、啜えてたよね……)

そして、その小さな口で、ぱくりと亀頭部分を啜える。

「う……っ」

妹の口腔の、生温かく柔らかな感触に、俊司は小さく声をあげてしまった。

「……ごめんね、早紀……こんなことさせて……」

そして、小さく喘ぎながら、そんなことを言う。

「イヤだったら……噛み千切ってもいいんだよ……覚悟は、できてるから……」

俊司の言葉に、早紀は、ペニスを啜えたまま、小さくかぶり振った。そんなことが、できるわけがない。

そして、いっそう熱心に、俊司のペニスに、淫らな奉仕を続けた。

口内でのぎこちない舌の動きが、いっそう健気に感じられて、俊司はその牡器官をますます熱くたぎらせていった。

そんな俊司の興奮が感染したかのように、早紀も、目元をぼおっと赤く染め、もじもじと腰を揺らしている。太腿をすり合わせると、スリットに食い込んだ縄が微妙に秘裂を刺激した。

早紀のそこは、いつしか恥ずかしいほどに蜜を溢れさせ、太腿まで濡らしてしまってい

る。

「ん……んむ……んく……んふっ……ふうん……」

早紀の鼻から漏れる喘ぎは、間違いなく快樂に濡れていた。

早紀の秘所を攻めるロープは、両手首を戒めるロープとつながっている。早紀は、無意識に両手を動かし、自らその幼いスリットを縄でこすり上げていた。

「んぱっ……」

とうとう早紀は、苦しくなって、俊司のペニスから口を離してしまった。

「あ……あはぁ……あむ……」

それでも口唇愛撫を続けようと、一生懸命になって竿の部分に舌を伸ばし、小首をかしげるようにして、ペニスを横啜えする。

「う……あぁッ！」

もどかしい刺激よりも、悅樂に支配されたようなその妹の仕草に、俊司は限界を迎えていた。

髪を撫でていた手でその頭を固定し、妹の顔めがけて、思いきり欲望を解放する。

「ひゃああん！」

びゅるるるッ！ と凄まじい勢いで顔を叩く熱い粘液の感触に、早紀は悲鳴をあげた。頬に、額に、髪に、べったりと白濁液が付着していく。

ひどく惨めで、屈辱的でさえあるこの仕打ちを受けて、早紀は、身の内から熱いうねりのようなものが湧き上がってくるのを感じていた。

「はぁぁぁぁぁぁぁ……」

そして早紀は、びゅるっ、びゅるっと精液を放ち続ける俊司のペニスを、空ろな瞳でぼんやりと見つめ続けるのだった。

早紀は、ティッシュで丁寧に顔をぬぐわれた後、ベッドの上で背後から俊司に抱き締められた。

ちょうど、二人とも膝立ちの格好である。

ロープは、そのままだ。緊縛され、体の自由が利かない状態で、背後からやわやわと乳房を愛撫されている。

「熱い……お兄ちゃん、熱いよ……」

早紀はうわ言のようにそう繰り返していた。

俊司は、ぬるぬるとした妖しげなジェル状の薬品を塗りこむようにして、早紀の胸を揉みだしている。

その薬が、じんじんと疼くような熱を、早紀の胸にもたらしているのだ。熱い疼きは快感に変換され、早紀の慎ましやかなピンク色の乳首を、痛いほどに勃起させている。

ぬらつくジェルが蛍光灯の光を妖しく反射している様が、ひどくエロチックだ。

「気持ちいいかい？ 早紀」

俊司が、早紀の耳たぶに、息を吹きかけるようにして訊いた。しかし、早紀は顔を真っ赤にさせてうつむき、答えない。

「ダメだよ、素直に返事しなきゃ」

「きゃぁん！」

早紀は、思わず甘い悲鳴をあげていた。俊司が、固く尖った先の乳首を、指先で弾いたのだ。

「返事は？」

「ご、ごめんないさい、お兄ちゃん……き、きもち、いい……」

消え入りそうな声で、早紀が言う。

「感じてるんだね？」

「そうなの……きもちイイ……きもちイイよ、お兄ちゃん……」

泣きそうな声でそう言いながら、早紀は俊司の腕の中でぷるぷると体を震わせる。

俊司は、満足げに肯いて、早紀のしなやかなうなじに舌を這わせた。

「はうううん」

早紀が、はっきりと悦びの声をあげる。

俊司は、早紀の胸を弄びながら、体を前に倒すようにして、その背中に舌を這わせた。

「はぁっ！ あ、あう……ん……ひああん！」

早紀は、高い声をあげながら、俊司に導かれるままに、次第に体を倒してしまう。

そして早紀は、まるで後方にその白いお尻を突き出すような格好で、ベッドの上に突っ伏してしまった。

腕を後手に縛られているため、上体を支えることも出来ない。早紀は、シーツに右の頬をこすりつけるような姿勢で、しばし、俊司の愛撫に甘く喘いだ。

ぬるっ、とした感触を残して、俊司の手が、早紀の胸から離れる。

「ふぁ……」

早紀は、どこか名残惜しそうな表情で、背後の俊司に流し目を送る。

「もう、ここはびっしょりだよ……」

可憐な肉の花びらに食い込むローブを、くいくいと動かしながら、俊司が言う。

「い、いや……っ」

これ以上はないというくらいに顔を赤く染め、早紀は目をそらした。

俊司は、くすくすと微笑みながら、すぐに外せるように結んであった股間のローブをほどいた。赤いローブは、たっぴりと早紀の愛液に濡れている。

ローブに隠されていた早紀のクレヴァスの中央部が、俊司の目の前にさらされた。そこは、無残なくらい紅く充血し、とろとろと愛液を分泌している。

「い、いやア……お兄ちゃん、見ないで……」

恥ずかしげにそう言いながら、早紀は必死で身をよじった。しかし、緊縛されている上に、しっかりとその丸いヒップを俊司に固定されているため、かえって誘うように腰を動

かしただけに終わってしまう。

「こんなに赤くなって……きれいだよ、早紀……」

そう言って、俊司は、早紀のその部分に口付けした。

「だ、だめエ！」

敏感な肉のひだを舌で舐られ、早紀が悲鳴をあげる。

「お、お兄ちゃん、ダメ……そんな……そこ、汚いよ……」

「そんなことないよ、早紀……それに、すごく美味しい……」

どこか陶然としたような口調の俊司の言葉も、早紀の羞恥を煽るだけだ。

(恥ずかしい……お兄ちゃんに、アソコ、舐められちゃってる……き、消えちゃいたい…
…っ！)

それでも、兄に対する嫌悪感は、不思議と湧いてこない。ただ、その部分を口で愛撫されて感じてしまう自分自身が、たまらなく恥ずかしかった。

「だめ、おにいちゃん……はうん……そ、んな……ア……だめエ……」

そう、早紀は感じていた。俊司の舌によって靡肉を舐めしゃぶられ、舌先で膣口を浅くえぐられて、かつてないほどの快感を感じてしまっているのだ。

早紀の羞恥心とは関係なく、その部分から止めどもなく熱い蜜が溢れ、太腿はぴくぴくと痙攣してしまう。

いつしか早紀は、さらなる口唇愛撫をねだるかのようになり、小ぶりなお尻を高く上げ、兄の顔に押しつけるようにしていた。

「あ……あうん……だめ……は……ふわぁ……あひ……ひやうん……」

すでに、拒絶の言葉はほとんどおざなりになっており、甘たるい喘ぎの中に埋没してしまっている。

俊司は、そんな早紀の反応をひとしきり楽しんだ後、唇だけで一番敏感な部分を啜えた。

「んきやううううッ！」

それだけの刺激で、早紀は、高い声をあげて体を反らせた。

さらに俊司は、まだ包皮に包まれた早紀のクリトリスを、ちろちろと舌先で刺激する。

「きゃあッ！ はッ！ んくう！ だ、だめ！ あ、ああアッ！」

ぴくぴくぴくっ、と早紀の華奢な下半身が小刻みに震える。

その、まだあどけなさを残す体が、絶頂を迎えかけたとき、俊司は、意地悪く愛撫を中断した。

「あああああ……ん」

イキそこねた早紀は、恨みっばい目で、肩越しに俊司を見つめた。その涙で潤んだ瞳が、あどけない顔に似合わない、ぞくりとするような色気をたたえている。

「お、おにい、ちゃん……」

早紀は、かすれた声で言った。

それでも、淫らなおねだりを口にするには、羞恥心が邪魔をしている。早紀は、どうし

ていいか分からない、といった様子だ。

そして、すぎるような表情で、俊司の顔を見つめている。

俊司は、愛液に濡れた口元をちょっとぬぐった後、白桃を思わせる早紀のヒップに両手を添えた。

「あぁん……」

熱くたぎる肉棒の先端が、クレヴァスの合間に押し当てられた感触に、早紀が声を漏らす。

しかしその声には、間違いなく、媚びと期待が込められていた。

「入れるよ、早紀……」

「おにいちゃん……」

早紀は、挿入を求めることも拒むこともできず、ただ俊司のことを呼ぶのみだ。

俊司が、ゆっくりと腰を進ませる。

ちゅぶっ、という卑猥な音をあげて、ほころびかけたクレヴァスが俊司のペニスを迎え入れていく。

「あ……ひiiiiiiii……ッ！」

逞しい兄の剛直が、ずりずりと肉の隘路に侵入していく重苦しいような感覚に、早紀は声をあげていた。

処女を失ったばかりの粘膜は異物の侵入にまだ慣れておらず、ひりつくような痛みを感じる。

それでも、たっぷりと愛液に濡れた俊司のペニスは、意外なほどスムーズに早紀の中へと呑み込まれていった。

「あく……」

男根の先端が子宮の入口に到達した感覚に、早紀は思わず歯を食いしばる。

「うう……っ」

嗚咽に似た声が、漏れる。

緊縛された上、動物のように這いつくばった姿勢で犯されるのは、ひどく惨めな気持ちだった。たとえ、相手が愛する人であっても。

しかし、その屈辱さえも、なぜか胸の中で妖しいざわめきになってしまう。

「う……んはぁ……っ……」

俊司が、ゆっくりと抽送を開始した。

ずるっ、ずるっ、と雁首が膣壁をこすっているのが分かる。

痛いような、苦しいような感覚とともに、熱い何かがお腹の中で育っていくような感覚。

その熱は、苦痛や羞恥をも呑み込んでいきながら、ますます強くなっていく。

「あ……っついい……おにいちゃん……あつい……あついで……」

はぁ、はぁ、はぁ、と喘ぎながら、早紀が訴える。

俊司は、それには直接答えず、腰を固定していた右手を、早紀の股間に持っていった。

「あ……ひゃうっ！」

前に回された俊司の右手の指先が、早紀の敏感な肉の芽を捕らえる。

「ひあ……お、おにいちゃん……そこ、ダメえ……」

クリトリスにもたらさせる鋭い快感が、膣全体に広がり、下半身を焼く熱を、次第に甘いものへと変えていく。

「ん……く、ふああッ！」

とうとう、早紀の体内で、快樂が一つの臨界を突破した。

「あいッ！ いう……ん……んくう！ あ、あ、あ、あう～ん……！」

苦痛を感じながらも、それを上回る快感を得ていることを示すように、早紀の声が蕩けていく。

その声を聞きながら、俊司は、少しずつ腰の動きを速くしていった。

くちゅっ、くちゅっ、くちゅっ、くちゅっ……という湿った音が、二人の結合部から漏れる。そして、早紀のその部分はさらに愛液を溢れさせ、太腿の内側を濡らしていった。

「覚えてばかりなのに、もう感じているのかい？」

媚びるような甘さをその喘ぎににじませている早紀に向かって、俊司が言う。

「早紀は、いやらしいコだね……」

「そ、そんな、そんなア……ひあうっ！」

抗議しかける早紀のことを、俊司は、新たな動きを送りこむことによって黙らせる。

「ひ、ひあ……あ、あう、んく、きっ、きょううん……！」

ぶるるるっ、と赤いロープで戒められた、スレンダーな体が震えた。

規則正しい、じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっという音は、早紀のそこが、ますます蜜を分泌していることをうかがわせる。

俊司の動きを追うように、鮮紅色の褌がめくれ上がり、そしてペニスに巻きこまれる様が、ひどくエロチックだ。

「早紀……」

俊司は、クリトリスを翳っていた手で再び腰を抱え、ますます腰の動きを速くする。

「あひっ！ いっ！ ンいっいっいっ！」

愛しい兄に背後から犯され、早紀はすすりなくような悲鳴をあげる。

もはや、クリトリスを刺激されなくとも、その激しい抽送だけで、早紀ははっきりと快樂を感じていた。

(おにいちゃんのが……なかで……うごいてる……うごいてるウ……)

その感覚に圧倒されるように、早紀は、まだ幼さの残る華奢なその体をゆすった。尖った乳首がシーツにこすられ、さらに硬くなっていく。

早紀のその部分は熱く熱を帯び、そしてその肉褌は、きゅんきゅんと俊司のペニスにかからみついて、着実に兄を射精へと追い込んでいった。

彼女 いや、それは、単なるプログラムの集積でしかなかったが、くるみの質問程度には、十分に答えることができた。一瞬くるみは、自分が話しているのが単なる人工物であることを忘れてしまった。

「あなたは、人類が滅亡することを、どう思ってるの？」

専門的な質疑応答が終わったとき、最後にくるみは、思わずそう訊いていた。

「思う、という言葉の定義が曖昧ですが」

オルガは、ディスプレイの中で、にっこりと微笑みながら続けた。

「人類は、十分に発達したAIを開発した時点で、特にもう必要の無い存在だということは、理解しています」

今一つかみ合わない、それでも、機械を相手にしているとは思えないナチュラルな会話。

それを切り上げ、部屋の外に出た時、くるみは、思わずため息をついてしまったのだ。

あれは、完璧な頭脳だった。少なくとも、ある部分で人間以上であることは確かだ。

(危険、だわ.....)

くるみは、心の中でつぶやく。

(ココにいる連中は、みんな確信犯なんだわ。だから当然.....人類を滅亡させることに、何のためらいも感じていない.....)

くるみは、静かな狂気に包まれていることを感じて、ぞっと体を震わせた。

(やっぱり、ココが“当たり”なんだわ。奴らの中枢はここで、MWVの開発資料も、ここにあるはず.....)

(それさえ手に入れば.....ワクチンを開発するコトだってできる。人類は、助かるんだ)

(でも、あたしのことだって、半分はバレてると思ってた方がいい.....多分、泳がされてるだけ.....)

(でも.....でも、あたしは負けない!)

くるみは、その童顔に似合わない緊張した表情で、自らにあてがわれた部屋へと向かうのだった。

第四章

- 狂気 -

俊司は、早紀を毎日のように抱いた。

力なく拒む早紀を拘束し、緊縛し、性感を開発しながら、淫らな性技を教えこむ。

そして、何度も何度も、早紀の胎内に、熱い精液を流しこんだ。

まだ十六歳の早紀は、妊娠の恐怖に震えた。兄のするあらゆる行為を受け入れる覚悟は、次第に固まってきていたが、どうしても妊娠することだけは避けたかったのだ。

まだ早過ぎる、という思いもある。それ以上に、生まれてくる子供を不幸にしくなかつた。それに、墮胎などという行為は、考えることさえ恐ろしかった。

早紀は、俊司の脚にすがりつきながら、繰り返し、避妊をするよう懇願した。

しかし俊司は、早紀が恐怖を覚えるほど、優しく、そして哀れそうな表情で、早紀の自由を奪い、その体を犯し続けた。

(もし……もし、赤ちゃんができちゃったら……)

俊司が、研究所内で、何とも知れぬ“仕事”に携わってる間、早紀は一人考えた。

(そしたら、生もう……。絶対に……。絶対に寂しい思いをさせないように……。一生懸命、立派なお母さんになろう……)

健気といえば健気な決心を固めながらも、早紀は、自分の内の何かが、少しずつ壊れていくような、そんな漠然とした不安を感じていた。

そして

早紀の食事は、普通、くるみか、俊司本人が運んでくる。そして、俊司が運んできたときは、一緒に食事をするのがここに来てからの日課になっていた。

が、この日の夕食は、くるみが運んできた。

「あの、お食事、お持ちしましたよ」

「あ、いつもありがとうございます」

銀色のワゴンで、トレイに乗った食事を運んできてたくるみに、早紀は丁寧にそう言った。

「……」

くるみは、思わず息を飲んでた。

目の前の早紀が、ひどく寂れそうな笑みを浮かべていたのだ。十六歳の少女が浮かべるにしては、あまりに儂い笑いだった。

「あ、あの……大丈夫ですか？ 体調とか、悪くないですか？」

「え……？ ううん、平気です」

早紀は、にっこりと微笑んだ。その顔は、笑顔になると、数段魅力的になる。

しかしそれは、昨日までの早紀の顔が浮かべていたものとは、どこか違う表情だった。

「えっと……あたしにできることだったら、何でも言ってくださいね」

くるみは、人の好きそうな童顔に、複雑な表情を浮かべながら、言った。

「じゃあ、そのう……やっぱり、一つお願いがあるんですけど……」

早紀が、申し訳なさそうに言う。

何気ない口調だったが、くるみは、ひどく緊張しながら、早紀の次の一言を待った。

「……お兄ちゃん」

夕食の時間が終わり、真夜中近くになってやってきた俊司に、早紀が話しかけた。

「何だい？ 早紀」

俊司が、白衣をハンガーにかけ、部屋の隅に吊るしながら訊く。

「生理 来たよ」

ぼつん、と小石を放り投げるような口調で、早紀が言う。

俊司は、ひどく神妙な顔で、早紀に向き直った。

「赤ちゃん、できてなかった……。あのね、ポシェットに入ってた分に余裕がなかったから、あの、児玉さんて人に、生理用品頼んじゃった」

「……」

「そしたら、ナプキンはあるけど、タンポンは持ってません、って、大慌てしてたよ。ちょっと、可笑しかった」

くくくっ、と早紀は、小さく笑った。

そんな早紀の目の前に、俊司が立つ。

「……お兄ちゃん……もし、赤ちゃんできてたら、どうするつもりだった？」

その顔から笑みを引っ込め、上目遣いで、早紀が訊く。

俊司は、そんな早紀の視線を、真正面から受け止め、言った。

「生んでほしかったよ」

その言葉に、ぴくっ、と早紀の華奢な体が震える。俊司は、そんな早紀の肩に手を置いて、続けた。

「僕と、早紀の、赤ちゃんだからね……」

「お兄ちゃん……」

ささやく早紀の唇に、俊司は、優しく口付けした。

ちゅっ、という、聞いている方が恥ずかしくなるような、ついばむようなキスの音が、部屋にかすかに響く。

「お兄ちゃん……っ」

早紀は、かすかに震える声でそう言って、ぎゅっ、と両腕を俊司の体に回した。

そして、しばらく俊司の胸の温度を頬で感じる。

「早紀……」

ささやくようにそう言いながら、俊司は、早紀の体をゆっくりと離す。

「口で、してくれるかい？」

そう言う俊司の声は、少しかすれていた。

俊司の言葉に、早紀が、頬を赤く染めながらも、こっくりと肯く。そして、フローリングの床に、両膝をついた。

「お兄ちゃん、ココ、大きくなってよ……」

そう言って、早紀は、スラックスの上から、すりすり俊司の股間を白い手で撫でた。そのあどけない顔に、どこか妖艶な笑みが浮かんでいる。

そして、ジッパーに指をかける。

中に収められたものが膨張しているために、ちょっとひっかかるジッパーを下ろすと、熱い怒張を隠したトランクスが隙間からのぞいた。

早紀は、まだなれない手つきで、俊司のベルトを外し、ホックを外して、スラックスごとトランクスをずり下ろした。

「あ……」

恐いくらいに反りかえった、間近で見る兄のペニスに、早紀は思わず声をあげてしまう。

強い牡の匂いが、早紀の鼻孔をくすぐる。それを不快に感じていない自分に、早紀は気付いていた。

「はぁ……ン……」

早紀は、どこか恍惚としたため息をつきながら、ピンク色の舌を俊司のシャフトに這わせ始めた。

俊司の、その優しげな顔に似合わない、浅ましく静脈を浮かした濃褐色のシャフトを、自らの唾液で濡らしていく。

「早紀……」

「お兄ちゃん、あたし……ちょっとヘンだね……おかしくなっちゃったみたい……」

ふっ、と口元に笑みを浮かべながら、早紀はそう言い、俊司の亀頭部分に口付けした。

そして、先端部分を浅く含み、先走りの汁を溢れさせる鈴口を、ちろちろと舐めしゃぶる。

「お兄ちゃんが、そうしたんだよ……」

「うん……」

早紀の言葉に、俊司は素直に肯く。

早紀は、何が可笑しいのかくすくすと微笑んだ後、ぱっくりと、その可憐な口に、俊司のペニスを啜え込んだ。

「ああ……」

俊司が、恍惚とした息を漏らす。

それを聞いて、早紀はどこか嬉しそうに目を細めながら、俊司に教えこまれたとおり、シャフトにピンク色の唇を滑らせた。

ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ……という卑猥な音が、部屋に響く。

俊司のペニスは早紀の唾液で濡れ、淫らな口唇愛撫の動きは、ますます滑らかになっていった。

「ン……ふうん……んふ……ンむ……んぶっ……ふう～ン……」

早紀は、媚びるような鼻息を漏らしながら、熱心に俊司のペニスを舐めしゃぶった。口内で大胆に舌を絡め、ときおり、じゅるっ、じゅるっ、と音を立てながら、唾液と先走りの汁をすする。

俊司は、はぁはぁと荒い息をつきながら、無意識にゆるゆると腰を動かしてしまっていた。

早紀が、そんな俊司の腰に両手を添え、頭をねじるように動かして、さらに激しく兄のペニスに奉仕する。

「うあああッ！」

俊司は、自らが教えこんだ妹の技巧に、思わず声をあげていた。

びくっ、びくくっ、と、早紀の小さな口の中で、俊司のペニスが律動する。

「さ、早紀……僕、もう……」

うめくようにそう言う俊司の顔を上目遣いで見て、早紀は、ちゅうっ、とペニスをきついくらいに吸引した。

そして、喉の奥まで、愛しい兄の亀頭を受け入れる。

ずるうっ、とペニス全体が飲みこまれ、口腔粘膜にこすりあげられる感覚に、とうとう俊司は欲望の枷をはずしてしまった。

「くああああッ！」

びゅくうっ、と、早紀の口の中の一番奥に、激しく精を放つ。

「んーッ！ ンぐっ！ んぶぶッ！」

ひどく苦しそうな早紀の声にならない悲鳴に、俊司が、慌てて腰を引く。

「ンあッ！」

ようやく解放された口で、短い悲鳴をあげる早紀の顔に、熱い白濁液の第二弾、第三弾が弾ける。

ぴしゃっ、ぴしゃっ、と痛いくらいの勢いで顔に当たる兄のスペルマを、早紀は、上気した顔で受け止めた。

「はああああ……」

その震える唇の端から、唾液に混じった精液が、糸を引いて垂れる。

ようやく、俊司の射精が終わった。

早紀のいたいけな顔も、さらさらの髪も、お気に入りのピンクのブラウスも、兄の大量のスペルマによって汚されてしまっている。

「はぁ……すごい、いっぱい出たね……」

白濁液にまみれた顔で、兄の顔を見つめながら、早紀は、ぼんやりとつぶやいた。

俊司は、濡らしたタオルで早紀の顔を丁寧に拭き、そして、何度も口付けした。

そして、ブラウスをはだけさせ、ブラを外して、胸を露わにする。

「次は、胸だよ……」

そう言いながら、俊司は、いつも早紀の胸を愛撫するときに使うチューブ入りのジェルを手の平に垂らした。

その、明らかに媚薬の混じった薬品を、早紀は、どこか熱っぽい目で見つめている。

「おいで……」

ベッドに腰掛け、そう言う俊司の膝の間に、早紀は素直にひざまずいた。俊司は、下半身に何もまっとうしていない。その股間では、早くもペニスが力を取り戻しつつあった。

早紀の胸に、俊司が、ジェルでぬらつく両手を伸ばす。

「あん……」

ジェルの冷たさに、早紀は、小さく身をよじった。

しかし、その冷たさはすぐに去り、代わって、不自然な熱が、早紀の双乳を包みこむ。

「あ、あう……ん……んうん……」

俊司の両手が、早紀の胸を優しく揉みしだく。早紀は、うっとりとして俊司の愛撫に身を任せた。

「早紀は、これがお気に入りみたいだね」

「し、知らない……」

からかうような俊司の言葉に、早紀は、頬を赤く染めながらそっぽを向いた。

そんな早紀の乳首を、俊司が、きゅっ、とつまむ。

「ひゃうん！ あ……あひッ……！」

鋭い性感に、早紀は、ふるふると震えた。

「素直にしないと止めちゃうよ、早紀」

口元に笑みを浮かべながら、俊司が言う。

「い、いじわる。お兄ちゃんのいじわる……っ！」

早紀は、顔を戻し、熱っぽい目で、俊司をにらみつけた。その瞳は、うるうると涙で潤んでいる。

「続けてほしいんだろう？」

そう訊かれて、早紀は、こくん、と肯いた。

「じゃあ、教えてあげたとおり、やってごらん」

再び肯いて、早紀は、胸を愛撫する俊司の手に、その手を重ねた。

(お兄ちゃんの手、おっきくて.....あったかい.....)

そんなことを思いながら、体を前にずらし、その胸で、俊司の陰茎を挟みこむ。

(あたし.....おっぱい、前より大きくなったかな?)

胸の谷間からのぞく赤黒い亀頭を見つめながら、早紀は、ふとそんなことを思った。

確かに、最近、ブラがきついような気がするし、ジェルにぬらつく自分の乳房は、以前よりも膨らんだように見える。

しかし、そんな考えは、胸に押しつけられる俊司のペニスの熱さに、次第に追いやられていった。

(お兄ちゃんのが、あたしの胸で元気になってく.....なんだか、嬉しい.....)

そんな自分のはしたない想いに突き動かされるように、早紀は、くにくにと体を動かし始めた。

ぬるっ、ぬるっ、とジェルに濡れた胸の谷間をペニスが往復する感触が、妙に生々しい。

「あぁ.....いいよ、早紀.....」

そう言いながら、俊司は、胸への愛撫を再開した。

早紀の乳房で、さらにきつく自らのシャフトを挟みつけながら、くりくりと指先で乳首を弄ぶ。

「あ.....ンあ.....お兄ちゃん.....やぁン.....」

早紀が、媚びるような声をあげながら、その華奢な体を震わせた。

そして、反撃とばかりに、胸の谷間からのぞく亀頭部分に、てるてる舌を這わせる。

「うっ.....」

敏感な粘膜を、かすかにざらつく舌でねぶられ、俊司は思わず声をあげてしまった。

ペニスにもたらされる快感もさることながら、愛らしい妹の淫らな仕草に、さらに興奮が高まる。

俊司は、マシュマロを思わせる柔らかさと弾力を有した早紀の乳房を、ぐにくにと揉みしだいた。

「はうん.....ンあ.....あぁぁ~ン.....」

早紀が、白い喉を反らすようにして、あからさまな喘ぎで快感を訴える。

「早紀.....早紀の胸、柔らかくて、すごく気持ちいいよ.....」

俊司は、どこか熱に浮かされたような口調で、そう言った。

その言葉に、早紀ははにかみながらも嬉しそうに微笑んで、再び俊司のペニスに舌を伸ばした。

そして、自らの体をより大胆に動かし、ジェルでぬらつく胸の谷間でシャフトをしごきあげながら、繰り返しペニスの先端にキスをする。

その早紀の目元は、興奮にぼおっと赤く染まり、時折漏れる喘ぎは、甘く濡れていた。

俊司が、乳房でペニスを挟みつけるのを早紀に任せ、指先で重点的に乳首を責め出す。

「きゃうううッ！」

早紀が、高い悲鳴をあげる。

しかし、俊司は手を止めず、尖った乳首を指先で激しくいらい、くりくりとしごくように刺激した。

「ア……お、おにいちゃん……それ……だめえ……ッ！」

早紀が、ミディアムショートの髪をふるふると振り乱しながら叫ぶ。

「いくのかい？ 早紀……」

「は、はずかしい……ンあッ！」

「おっばいだけでイっちゃうんだね、早紀……」

「あひッ！ ひゃうううッ！ だ、だめえ……もう、もうだめえッ！」

びくびくびくっ、と早紀の体が痙攣する。

「お、おにいちゃああああん！」

「早紀ッ！」

俊司は、再び早紀の双乳を驚づかみにし、激しく腰を使った。

妹の乳房で、怒張をしごきあげ、自らを限界にまで追い込む。

その兄の行為が、妹を絶頂まで押し上げた。

「あッ！ イっ……く……イ、イっちゃうううううううううーッ！」

「早紀いッ！」

高い絶頂の声をあげる早紀のあどけない顔に、俊司は、再び大量の精を放った。

二度目だというのに、どびゅううっ！ という音すら聞こえそうな、激しい射精。

「あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ ああアーツ！」

何度も何度も熱いスペルマを浴びせられる感覚に、早紀は、立て続けに絶頂を感じていた。

俊司は、服を着て、早紀の部屋から出た。

シャワーは、別々に使った。生理中の早紀を思いやっただけのことである。

そして、俊司が、これから東京に戻ることを告げると、早紀は心底寂しそうな顔をした。早紀を抱いた後、朝まで同じベッドで寝るのが、ここに来てからの二人の日常だったのだ。

しかし、俊司には、東京で見届けなくてはならないことがあった。

照明が抑えられ、薄暗い廊下を、俊司は、どこか暗い表情で歩いている。

「いっそ、恨んでくれた方が、よかったかもな……」

窓の外の暗い空に目をやりながら、ぼつり、と俊司は呟いた。

俊司が東京に帰ってから、一週間。

早紀は、日々をひどく退屈に過ごしていた。

このところ、早紀を取り巻く環境は、意外なほど緩やかになっている。TVにはアンテナが接続され、普通の番組を見ることもできるようになっていたし、早紀が望めば、外の敷地を散歩することも許された。

研究所の敷地は、まるきり牧場のようであった。ゆるやかな緑の丘が連なり、木製の柵が、区画を仕切っている。さらにそこでは、牛や羊などが、のんびりと草を食べていた。

無論、散歩は監視付きである。

早紀の監視役は、くるみだった。

くるみ自身には、早紀に一番年齢が近いのは、くるみだから、と説明されている。確かに、早紀とくるみが並んで歩いていると、同年代の少女同士にしか見えない。

無論、くるみは、そんな説明など、信じてはいなかった。

(誘われてるんだろうなあ、コレは.....)

くるみは、Lの組織に敵対する“結社”の一員である。そして私たちも、そのことには薄々気付いている様子だ。

(組織は、あたしが尻尾を出して結社と連絡するところを押さえようとしているんだわ...
...この研究所で、唯一、組織の構成員でない彼女と接触させることによって.....)

(でも、あたしだって、結社の一員だもの。なめてもらっちゃ、困るわよ)

今、二人は、研究所の敷地の大部分を占める牧場の中の道を歩いている。

青い空に、綿菓子のような雲が浮かんでいた。ひどくのどかな風景だ。

「ふーっ」

一息ついて、大きなポプラの木の下のベンチに、早紀が腰掛けた。周囲では、やはり何本かのポプラの木が、地面に影を落としている。

くるみは、立ったままだ。

「あの.....児玉さん、座らないんですか？」

早紀が、小首をかしげながら言う。

くるみは、しかし、いつになく神妙な表情を、その幼い顔に浮かべて、白衣の懐から携帯電話を取り出した。

「？」

怪訝そうな早紀に、にっ、と小さく笑いかけた後、くるみは、いくつかの番号をブッシュした。

そして、しばらくディスプレイを確認した後、早紀に視線を戻す。

「速水さん.....だと、所長とまぎらわしいから、早紀ちゃん、でいいかな？」

「え、ええ.....」

「代わりに、あたしのこともくるみでいいから」

「はい.....」

明らかに今までと様子が違うくるみにとまどいながら、早紀は返事をした。

「単刀直入に言うわ。あたしはね、あなたを監禁しているこの組織の、敵なの」

「てき……？」

「そう。あんまり詳しくは言えないけどね。……この組織は、人類を滅亡させようとして
いるのよ」

「えええ？」

あまりに突拍子のないくるみの発言に、早紀は大声をあげていた。

「信じられないのは無理ないわ。って言うか、別に信じてもらわなくてもいい。つまりは、
あたしが、この研究所に忍びこんだスパイだってことを分かってくればね」

「くるみさんが……スパイ、ですか……？」

あまりにも非日常的な単語の連続に、早紀はきょとんとした顔をするだけだ。

「そ、スパイ。エージェントって言った方がカッコいいんだけどね。とにかく、あたしは、
あなたを逃がしてあげることができるの」

「逃がす？」

「そう。家に帰れるのよ」

「……」

早紀は、口をつぐんでしまった。

「どうしたの？ それとも、あたしがこんなだから信用できない？ これでも、けっこう腕利きのよ」

そう言って、くるみは薄い胸を張った。

「今、あたしが仕込んだウイルスが、研究所中のコンピュータをダウンさせてるわ。……
皮肉な話だけどね」

「皮肉って？」

「だって、こここそが、人類を滅亡させるウイルスの研究所なんだもん。ま、そんなこと
はいいわ。さ、一緒に来て。向こうに、車隠してるから」

「なんで、ですか？」

早紀の言葉に、くるみは思わず目を見開いていた。そのあどけない顔が、ますます幼く
なる。

「なんでって……早紀ちゃん、家に帰りたくないの？」

「……」

「それとも、あたしが信用できない？ だいじょうぶよ。別に、ヘンなところに連れてこう
っていうつもりはないから。ただ、警察に行って、今まで閉じ込められてたことを正直に
言ってくればいいだけなんだから」

「そ、そんなの、だめです……」

「何がだめなの？」

早紀の予想外の反応に、くるみは怪訝そうな顔をする。

「だって……だってここ、お兄ちゃんの研究所ですよ」

「あのねえ、その速水所長が、あんたを監禁してたんでしょ！」

くるみは、噛みつかんばかりの勢いで、そう言った。

「詳しくは詮索しないけど……早紀ちゃん、ひどい目にあっただんでしょ？ そんなお兄さんに義理立てする必要なんかはないよ！」

「義理立てとかじゃありません！ 何も知らないくせに！」

早紀が、くるみに負けないくらいの大声で、言う。

くるみは、その眼鏡の奥の目を、ずっと細めた。

「 ストックホルム症候群」

そして、ぼつんと呟く。

「え？」

「ストックホルム症候群よ。今の、早紀ちゃんの状態。誘拐や監禁の被害者が、犯人に、必要以上の同情や連帯感、好意などをもつことを、そう言うの……」

「しょうこうぐんって……くるみさん、あたしが病気だって言うんですか？ 気が狂ってるって……！」

「それに近い状態よ。確かに、分からないわけじゃないけど……」

くるみが、小さくため息をつく。

と、ばあん！ という乾いた音が、辺りに響いた。

ベンチから立ち上がった早紀が、くるみの頬を平手で打ったのだ。

「な、何するのよ！」

「知ったふうなこと言わないで！」

頬を押さえて言うくるみに、早紀も涙声で叫ぶ。

「いきなり、訳わかんないこと言って、人の気持ちを勝手に決めつけて……そんなんじゃない！ あたしとおにいちゃんは、そんなんじゃないのっ！ あたしは、あたしはずっと前から……！」

「……」

早紀のあまりの剣幕に、くるみは茫然と立ち尽くす。

そのため、次に起こったことに対するくるみの反応は、一瞬だけ遅れてしまっていた。

「！」

危険を感じて飛びすさり、懐から拳銃を抜いて、引き金を絞る。

その一連の動きを行う前に、くるみは、くたっ、と地面に横たわってしまっていた。

「く……くるみ、さん？」

早紀は、茫然と呟いた。

くるみの白衣の肩の部分に、小さな穴があいている。

「大丈夫。死んでなんかないわ」

そう言いながら、ポプラの木の陰から現れたのは、豪華な金髪の美女だった。その右手

に、サイレンサーをつけた拳銃を握っている。

「弾の中にクスリが仕込んであるの。要するに、麻酔弾よ」

「誰、なんですか……？」

「あなたのお兄さんのスポンサーよ。ルーシィって呼んでくれればいいわ。……今、研究所はシステム復旧で大騒ぎなんだけど、こういう時って、意外と管理職はヒマなのよね」

そう言いながら、ルーシィ Lは、横たわるくるみに近付いていく。

「可愛い顔して眠っちゃって……でも、ちょろちょろ危なっかしく動き回ってるより、よっぽど似合ってるわね」

Lの横顔に浮かんだ笑みに、早紀は、ぞくりと背を震わせた。

「殺す……んですか？」

「ふふふっ」

早紀の言葉に、Lは含み笑いを漏らした。

「このコが何を言ったか知らないけど、ずいぶんとおっかないコトを言うのね。まさか、そんなマネしないわ」

「……くるみさん、言っていました。この研究所で、人類を滅亡させるウィルスを開発してるって」

「……」

「本当、なんですか？」

Lは、その白晳に微笑を浮かべたまま、早紀に向き直り、口を開いた。

「明日、お兄さんが帰ってくるわ。彼に訊いてみるのね」

Lの言葉通り、俊司は、翌日の昼に研究所に戻ってきた。

その顔は、いつにも増して青白い。

部屋で迎えた早紀が、思わず言葉を失ってしまうほどに、俊司は憔悴しているようだった。

「お兄ちゃん、どうしたの……？」

早紀が、心配そうに訊く。

俊司は、悲痛な声で、静かに言った。

「君のお母さんが、僕たちの父さんを殺したよ」

「……え？」

言葉の意味が脳に届かない。早紀は、思わず聞き返していた。

「速水紀子が、速水重蔵を殺した」

俊司は、わざわざフルネームを使って言い直し、そして続けた。

「僕が、そう仕向けたんだ」

早紀は、ようやく俊司の言わんとしていることを理解した。

兄の言葉は、嘘とは思えない。本当のことなのだろう。

母が、父を殺した。

長い間、義父だと思っていた、実の父親を。

そのことに、さほどショックを受けていない自分自身に、早紀は多少の驚きを感じていた。

(やっぱりあたし.....おかしいのかもしれない.....)

そして早紀は、ぼんやりとそんなことを思うのだった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第五章

- 淫獄 -

俊司は、研究所に戻るなり、寝込んでしまっていた。

高熱だった。額に乗せた濡れたタオルが、すぐに温まってしまうような熱だ。

俊司が寝ているのは、早紀の部屋のベッドである。早紀は、所員が俊司を移動させようとするのを丁寧に断り、自ら看病を買って出たのだ。

夜は、ソファで眠った。朝起きるとちょっと体が痛かったが、じきに慣れた。

それよりも、兄の体が心配だった。

俊司は、何かになさされているようだった。

君のお母さんが、僕たちの父さんを殺したよ。

速水紀子が、速水重蔵を殺した。

俊司の言うことは本当だった。

音声を絞ってTVをつけると、ワイドショーでそのことを特集していた。現役の製薬会社社長が、その妻に惨殺されるというのは、確かに、それなりにショッキングなニュースだったのだろう。

陳腐で無意味なセリフを言い続けるキャスターの背後に自分の家の塀が映っているのが、ちょっと可笑しかった。

そして、数日でその件は、取り上げられなくなった。

無論、早紀にとっては何も終わっていない。

そして、俊司にとっても。

僕が、そう仕向けたんだ。

兄が、父を殺すように、母を仕向けた。

そういうこともあるかもしれない、と早紀は考えていた。母は、父のことを深く憎んでいたし、父は母にいかなる意味でも愛情を抱いていなかった。母が父を殺すように誘導するなど、ずいぶん容易だったような気さえする。

しかし、それはそれとして、全く現実味が湧かないのも事実だ。

死体を前にしたわけでも、母親と話をしたわけでもないのだから、当然のことだろう。

ふと、早紀は、自分が受けるべきショックの全てを、俊司が代わりに引き受けたのではないかと考えた。

俊司には、そういうところがある。

熱に浮かされながらうわ言めいたうめき声をあげる兄が、ひどく可哀想に思えた。

その少し前。地下室。

倉庫として使われていたのだろうか。5メートル四方ほどのスペースは、壁も床もコンクリートが剥き出しで、ひどく無表情だ。

部屋の端に、鉄製のベッドが置かれ、マットレスが敷かれている。

そのマットレスの上に、くるみは横たえられていた。

ほとんど、全裸に近い格好である。白衣やスカートはおろか、下着まで、すべて剥ぎ取られた状態だ。

純白の、清楚なデザインのブラウスはまだ身につけているが、前は全てはだけられている。結局、その幼げな裸身はほとんど剥き出しである。

しかし、くるみは、自分でそのブラウスのボタンを留めることができない。

両手にそれぞれ手錠をかけられ、万歳の姿勢で、ベッドのパイプに固定されているのだ。

剥き出しの蛍光灯が灯っただけの薄暗い部屋に、ういひひひひ……ん、と、わずかな音が響いている。

それは、いわゆるローターの音だった。

左右の乳首と、クリトリスの部分に、それぞれバンソウコウで固定されたうずらの卵大のローターが、くるみの華奢な体を責め苛む音である。

「んく……う……くっ……んあう……」

噛み殺そうとしても、噛み殺しきれない喘ぎが、くるみの、小さな口から漏れ出る。

くるみは、まだ催眠薬の影響で朦朧となってるうちに、この部屋に運びこまれ、手錠をかけられた上に、服を脱がされた。

そして、扇情的なピンク色の小さな責め具を装着され、さらには、妖しげな薬品を注射されたのだ。

全ての処置をしたのは、Lと、途中から合流したエイプリル・バーネットだった。

そして二人は、くるみの意識が完全に回復する前に、ここを出て行ってしまった。

注射は、遅効性の媚薬のたぐいだったらしい。最初は嫌悪の対象でしかなかったローターの震動が、次第に快感となって、くるみの体と心を侵食していったのである。

くるみは、屈辱に涙をこぼしながら、何度も絶頂を感じてしまった。

すでにくるみの秘所は熱い愛液を溢れさせ、マットレスまでびしょびしょに濡らしている。

くるみの、顔相応に幼い体は、アクメの余韻に浸る間もなく、強制的に快感を入力し続けられた。

「んぐッ！ ひっ……いいッ……！ んあああああッ！」

まるで、見えない相手に弄ばれているかのように、体をよじり、腰を浮かし、背中を反らしてしまうくるみ。

どれくらい、そんな時間が続いたのか……

ようやく、頑丈そうな鉄製の扉が開いた。

手を濡らす。

「気持ちいいんでしょ……それだけが、全てなのよ……」

がくがくと体を痙攣させた後、ぐったりとマットレスに体を落としたくるみに、エイプリルが言った。

しかし、くるみは返事をする事もできない。

エイプリルは、そんなくるみの呆けたような顔を見ながら、するすると衣服を脱ぎ捨てた。

白衣や、意外とおとなしいデザインのワンピースなどを脱ぐと、その下にまとっていたものが剥き出しになる。

それは、赤い革製の、コルセットに似た衣服だった。いわゆるボンテージ・デザインの衣装で、乳房の部分は、その半球型の膨らみを強調するような形にカットされている。そして、股間の部分は金属性のリングになっており、やはり革製の細いベルトがそれに接続されて、辛うじて下着の形をとっていた。

無論、リングの部分はエイプリルの秘所を隠していない。繊細なヘアの下でほころぶ肉の花弁が剥き出しになっている。

エイプリルは、ベッドの横に置かれたキャビネットから、小さなプラスチックの箱と、それから奇妙な棒状の道具を取り出した。そして、箱はキャビネットの上に置き、まるで見せつけるように、棒状の道具をぶらぶらと揺らす。

「……っ！」

悦楽に上気していたくるみの顔に、緊張が走る。

それは、黒光りするシリコン製のディルドーだった。まがまがしく反りかえったその両端に、亀頭を模した膨らみがあるタイプである。

エイプリルは、兇暴なまでに長大なそれに、ねっとり舌を絡めた。

おぞましい人工ペニスに、エイプリルの唾液で濡れていくのを、くるみは、どこか魅入られたような瞳で見つめてしまう。

エイプリルは、そんなくるみに、悪戯っぽく笑いかけた。そして、両手をディルドーに添え、股間のリングに通すように、ゆっくりと自らに挿入していく。

「ん……んんっ……んくっ……」

さすがに小さく声を漏らしながら、エイプリルは、その形のいい眉を切なそうにたわめた。

が、くるみを責めたてているうちに興奮していたのか、エイプリルのそこはじっとりと濡れており、意外とスムーズにその人口ペニスを受け入れていく。

ようやく、エイプリルの秘所が、双頭ディルドーの半分を飲みこむ。ちょうど、リングがくびれた真ん中部分を固定した。

「や、やめて……」

くるみが、顔に怯えの色を浮かべながら、体をずらす。しかし、手首を手錠で固定され

ているため、逃げることは不可能だ。

手錠の鎖が、じゃらじゃらと鳴る。

「くるみちゃん……まだバージンなの？」

くるみは、無言である。しかし、その表情は、エイプリルの言葉が凶星であることを物語っていた。

「どうせ、あなたみたいなコは、初めては好きな人に捧げたいとか、そんなコト考えてるんでしょ。……でも、ダメよ」

そう言いながら、エイプリルは、四つん這いの姿勢でベッドに上がり、くるみににじり寄った。

「あたしはね、初体験はレイプだったわ。相手はストリートのチンピラでね、十三の時……。それで、一発で妊娠させられて……父さんに、処置してもらったの。辛くて、悔しくて、苦しくて……父さんのこと、嫌いになりそうになった」

エイプリルの顔に、凄惨な笑みが浮かぶ。

それは、歪んだ笑みではあったが、怖いくらいに美しい顔だった。

「その父さんは、あたしがきちんとお礼を言う前に、墮胎手術反対を唱える狂った連中に殺されたの……。人間ってものに絶望するには、十分な理由だと思わない？」

そう言いながら、エイプリルは、その白い手で、くるみの柔らかな頬をゆっくりと撫でた。細かな震えが、手の平を通して伝わってくる。

「ふ……復讐、なの？」

ようやくそれだけ言ったくるみの膝を、エイプリルは、頬から離れた手で強引に割り開いた。そして、くるみの脚の間に、その腰を進ませる。

ひんやりとしたディルドーの先端がクレヴァスに触れた感触、くるみはびくっと体を震わせた。しかし、快楽に冒されたその小さな体では、エイプリルを押しつけることはできない。

「復讐なんかじゃない……仲間が、欲しいの……」

そう言いながら、エイプリルは、ゆっくりと、しかし確実に腰を進ませていった。

「いやああアア……ッ！」

すでに愛液で濡れているとはいえ、ほとんど無毛のくるみのそこは、ひどく幼い。

その部分にはどう見ても大きすぎるディルドーを、エイプリルは、残酷にねじ込んでいった。

「ひざいいッ！」

くるみが、悲痛な叫びをあげる。

しかし、エイプリルは動きを止めない。

「んぐ……あ……あア……ああああッ！」

絶望に彩られた、血を吐くような叫び。

エイプリルは、ディルドーの先端に何か当たるのを、膣内粘膜で感じた。

異物の侵入を健気に押しとどめようとする、儂い純潔の証しだ。

エイプリルが、さらに腰を進ませる。

ディルドーによって処女膜が破られるぷちぷちという感触が、伝わってきた。

「あ！ ああああ！ あああアアアッ！」

くるみが、眼鏡の奥の目を見開き、信じられないような苦痛に、叫びをあげた。

そして、必死になって細い腕を動かそうとする。

が、手錠の内側が鉄パイプにあたる、がきッ、がきッ、という音が響くのみだ。

無力な抵抗を突き破ったディルドーが、ずるうっ、とくるみの繊細な膣内を押し開く。

「はぐッ！」

くるみは、一声叫び、そして空気を求めるかのように、ぱくぱくとその小さな口を開閉させた。

痛々しく引き伸ばされたくるみのそこから、鮮血が溢れる。

「……ツう……うあ……あ……あうう……」

くるみは、かくん、と壊れた人形のように頭を落とし、失神してしまった。

どれくらい、気を失っていたのだろうか。

くるみは、燃えるような熱さによって、強引に現実に戻された。

体内深くを何か執拗に摩擦する、そんな熱さだ。

脳髄が溶かされてしまうのではないかと思わせるような、圧倒的な熱量。

理性も、思考も、意識も、何もかもが熔け崩れてしまい、はっきりとした形にならない。

残るのは単純な感覚だけだ。

「あ……つ……い……」

くるみは、ぼんやりと呟いていた。

その童顔から予想されるよりもなお幼い、童女のように頼りない声である。

「あつい……あつийょ……あつい……あつийょ……あつийょ……」

次第に、熱い塊が、体内をずんずんと動いているのが分かってくる。

さらには、視覚と聴覚も、意味のある情報を把握するようになっていった。

エイプリルが、くるみの小さな体にのしかかるようにして、抽送を続けている。

あの鋭い苦痛は、もう無い。凄まじい破瓜の痛みが、全て熱に変換されてしまったかのようだ。

身を焼くようなこの熱が、しかし、苦痛ではない。

それどころか、この体内で暴れ狂う巨大な温度が、そのまま兇暴な快感であるかのよう
に思われた。

そんなことを考えた瞬間に、熱は、間違いなく激しい快樂へと変化した。

「ふああああああああああああああッ！」

思わず、声をあげてしまう。

(……う、うそっ！……なんでえ？)

わずかに熔け残った理性が、ぼんやりと思う。

(……そんな……これは……クスリの、せい……？)

(……そう……そうだよ……これって……クスリの……せい、なんだ……)

熱い快樂のうねりにどろどろの意識を途切れさせながら、くるみはそう思った。

媚薬を盛られ、血の通わぬ性具で処女を散らされ、しかも感じてしまっているという屈辱が、胸のうちで燃え、そしてそれさえも、圧倒的な快樂の炎に飲み込まれてしまう。

「んぐ……え……えうっ……う……うあ、あああああッ！」

熱い涙が溢れ出る。そうやって涙を流すことすら、どこか心地よかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

エイプリルが、短く喘ぎながら、ぐいっ、ぐいっ、とその細い腰を容赦なく突き上げる。

そのたびに、くるみの体の中で渦巻く熱が育っていくようだ。

「あいッ！ ひい……いいいッ！ あッ！ ひああアッ！」

断続的に高い声をあげるくるみの顔を、エイプリルの、緑とも褐色とも灰色ともつかない不思議な色合いの瞳がのぞきこむ。

「……感じてるの？ くるみちゃん」

エイプリルの残酷な問いに、くるみはぶんぶんとかぶりを振る。

「うそばかり……乳首が、こんなに立ってるわよ」

そう言って、エイプリルは、ささやかな胸の頂点にある桜色の乳首を、きゅっつつまんだ。

「ひゃうううウッ！」

びくン、とくるみの体が跳ねる。

「やっぱり感じてるんでしょ？ くるみちゃん、実はMなんだよね」

「ち、ちがう……ンアッ！ そんなこと……！」

「だって、乳首、いじめればいじめるほど、立ってきちゃうよ？」

「それは……それは、クスリのせい……きゃあああッ！」

つままれた乳首を残酷に持ち上げられ、くるみは体を反らしながら身悶えた。

苦痛と恥辱が、体内の熱をさらに煽り、今まで感じたことの無かったような快感へと変化させていく。

「可愛いおっぱい……もっともっと、いじめたくなっちゃう……」

エイプリルは、その顔に似合わない淫蕩な笑みを浮かべ、キャビネットの上に乗せられたままの箱に手を伸ばした。

「……？」

一時的に激しい抽送から解放されたくるみの顔に、かすかに不審そうな表情が戻る。

エイプリルが箱から出したのは、太く、鋭い一本の針だった。

「ま……まさか……」

くるみが、唇をわななかせる。

「あとで、うんと可愛いアクセサリー、用意してあげるからね」

針を、消毒薬を浸した脱脂綿でぬぐうようにしながら、エイプリルは言った。

「や、やめて！ やめてやめてやめてえええエーッ！」

くるみが、がちゃがちゃと鎖を鳴らして暴れ出す。

「くくくっ……くるみちゃんのおそこ、きゅううって、締めつけてる……」

髑るような口調でそう言いながら、エイプリルは、強引にくるみの左の乳首を捻りあげた。

「きゃああアアッ！」

くるみが、子供のように絶叫する。

「……やめて、ほしい？」

打って変わって優しい声で、エイプリルが訊く。

くるみは、しばし暴れることを忘れて、激しく肯いた。

「ダメよ」

そう言った時には、エイプリルは、くるみの乳首に、水平に針を突き通していた。一瞬の空白。

「……あああああああああああああ！」

痛みが脳に到達するとともに、事態を理解したくるみが、声をあげた。

自分の乳首に、まるで冗談のように、太い針が突き通っている。

かああっ、と視界が赤く染まった。

痛覚よりも、視覚的な衝撃が、くるみの意識を感乱させる。

「イ、イヤあああああああああッ！ 抜いて！ 抜いてエーッ！」

くるみは、涙をこぼしながら訴えた。

しかしエイプリルは、出血を抑えるためか、針を抜こうとしない。

純潔を奪われながら、さらに純潔を奪われる。そんな感覚に、くるみは混乱しきっていた。

「ヤダよお！ もうヤダあ！ ヤダヤダヤダあああああああッ！」

まるで、駄々をこねる子供のように、くるみは叫び続けた。

すでにその胸には、人類結社の一員としての誇りも、エーエージェントとしてのプライドも無い。あるのは、喩えようも無いみじめさだけだ。

「ホントにイヤなの？」

エイプリルの声は、相変わらず優しい。

そして、優しい笑みを浮かべながら、残酷に腰をグラインドさせる。

「はぐッ！」

真紅の視界を、白い光が貫く。

くるみは、叫ぶことすら忘れ、ぴくぴくぴくっ、と体を痙攣させた。

「くるみちゃんのおそこ、エッチなお汁で大洪水よ」

「……ウ、ウソ！」

「嘘じゃないわ。ほら、くちゅくちゅいってるの、聞こえない？」

そう言いながら、エイプリルは、ゆっくりと腰を使い、ディルドーでくるみのそこをえぐった。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ……

淫猥な粘液質の音が、地下室の空気を震わし、くるみの耳に届く。

血の混じった愛液に濡れた靡粘膜が、おぞましい人工ペニスにからみつく音だ。

「あ……あ……あ……あああ……」

自らの浅ましさを突き付けられ、くるみは耳まで赤く染めながら、顔を背けた。

「ち……ちがう……こんなの……こ、これはクスリのせい……クスリのせいだもん……」

そして、まるで自分自身に言い聞かせるように、そうつぶやく。

そのつぶやきも、はぁっ、はぁっ、という喘ぎの中に埋没していった。

熱っぽい、間違いようもなく、官能に濡れた喘ぎ。

「クスリの……あう……うああっ……クスリの、せい……ひあっ……ふわん……はうううう……ッ！」

痛みと衝撃に一時忘れかけていた官能が、前以上の勢いでくるみの幼げな体を翻弄する。

乳首を針で貫かれた痛みさえ、じんじんとした疼きとなって、その快感を煽りたてているのだ。

ひどくみじめで、泣きたくなるような快美感。

それが、くるみの幼げな体の中に満ち、渦巻き、全てを支配しようとしている。

「薬のせいで、痛いのが気持ちイイの？」

「そう……そうだもん……はぐッ！ クスリの、せい……だ、よう……んんんんんあッ！」

エイプリルは、まだ無傷の右の乳首を、すりすりとしごきあげた。

そして、ぶっ、と優しげな仮面を脱ぎ捨て、淫らな笑みを浮かべる。

「そんな都合のいい薬、あるわけないでしょ」

「え……？ あ、あああ、あぐうううッ！」

乱暴に乳首を摘み上げられ、くるみが細く白い喉を反らす。

「あれは、ただの興奮剤よ。それにね、効果時間だって、とっくに切れてるんだから」

「……そ……そんなア……」

「くるみちゃんはね、根っからのマゾなのよ！ こっちが恥ずかしくなっちゃうくらいだね！」

「そんな……そんな……そんな……そんなあああッ！」

哀しげな、くるみの叫び。

その悲痛な声を聞きながら、エイプリルは、もう一本の針を取り出し、素早く消毒して、

「なあに？ 今さら照れるようなカンケイじゃないでしょ」

早紀はそう言って、ひどく複雑な表情で微笑んだ。

「……兄妹、なんだからさ」

そのあどけない顔に似合わない、どこか大人っぽい表情である。

「だから……だからね……あんまり一人で背負いこまないで、きちんと、話してほしいな」

「早紀……」

俊司が、まぶしいものでも見るような表情で、妹の顔を見つめる。

「きちんと食べて、落ちついてからでいいから、ね」

早紀は、まるでダメを押すかのようにそう言って、そして今度は屈託のない表情で笑うのだった。

第六章

- 理由 -

りん、りん、りん、りん……。

部屋に、かすかな鈴の音が響いている。

絶え間なく響く、しかし耳障りでない小さな音。

それは、くるみの可憐な乳首を貫くピアスから漏れる音だった。

金色の、小さなDの字型のピアスである。それに、猫の首輪につけるような、小さな鈴が付いているのだ。

くるみは今、両手を戒められ、それぞれ天井から下がる鎖に繋がれている。

強制的に両手を上げさせられ、さらには、その細い脚を緩やかに開いていた。

ほとんど、全裸である。

身に付けているものといえば、ピアスと、三つ編みを留めるヘアゴム、そして、眼鏡くらのものだ。

その後エイプリルは、放心状態のくるみを同じ地下フロアの浴室に連れていき、汗と体液と破瓜の血に汚れたブラウスを破棄し、丁寧に体を洗った。

くるみは、エイプリルに髪を洗われた後、ぬるま湯とグリセリンの混合液を、何度も浣腸された。

泣き喚き、何度も許しを請いながら、くるみは、エイプリルの目の前で、屈辱の汚濁を排泄させられ続けたのだ。

最後に、ほとんど透明なままの薬液を排泄するくるみに、エイプリルは、蕩けるようなキスをした。

その瞬間、くるみは激しく昇り詰めていた。

そして、乳首に鈴を下げたピアスを取り付けられたのである。

エイプリルは、乾かしたくるみの髪を再び三つ編みにして、ご丁寧に眼鏡までかけさせた。

「こうしないと、くるみちゃんって感じがしないものね」

エイプリルは、そんなことを言って、くすくす笑った。

そしてくるみは、ほんの少しの仮眠の後に、手かせをはめられ、天井から下がる鎖に繋がれたのである。

今、くるみの足元に、エイプリルと、そしてLが、横座りのような姿勢で座っていた。

二人は、くるみの脚に手を添え、その陰部に、唇を寄せている。

エイプリルは前からクレヴァスを、Lは後からアヌスを、口と舌で愛撫していた。

二人が身に付けているのは、エナメル製らしい、ひどく扇情的なデザインの衣服だった。ほとんどおそろいの外観だが、エイプリルのは赤、Lのは黒である。スタイルのいい二人

が着ているため、そのビザールなデザインが引っさそう引き立っていた。

小さなベルトや、金属性のリングが多用されたその衣装の股間の部分には、禍々しく反りかえったディルドーが装着されている。

二人の口唇愛撫は、執拗だった。

まだ幼い色合いのラビアを甘噛みし、クリトリスを吸引して、アヌスを舌でえぐり、会陰の部分を舐めしゃぶる。

そして、前後から会陰に伸ばした二人の舌が時折触れると、エイプリルとLは、嬉しそうに目を細めながら笑い合うのだった。

「はぁぁ……あうん……んぐ、んん、ん、んうっ……ふうん……んあぁぁぁぁぁ……」

くるみは、二人の口と舌に責められて、絶え間なく甘い喘ぎを漏らし続けていた。

湧きあがる快楽に、その拘束された体をよじり、ぴくぴくと可愛らしく体を震わせる。

その度に、りん、りん、と、鈴が軽やかな音をたてた。

自分の、何か大事なものが剥奪された、その証しである音。

その響きに、くるみはますます体を火照らせ、自分でも驚くほどの愛液で、子供のような外見のスリットを熱く濡らしてしまうのだ。

快感で脳が飽和状態になり、何も考えられない。もし、もうひと押し、何か刺激を与えられれば、その快感は溢れだし、絶頂の大波がくるみをさらっていくだろう。

しかしエイプリルとLは、くるみがアクメを迎えようとする、ずっとその攻撃の手を緩めてしまう。

そして、潮が引くように絶頂の予感が退くまで、その肌を触れるか触れないかという微妙なタッチで愛撫し、快感を一定の高さでアイドリングするのである。

「ふわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……う」

もう何度目かの絶頂の兆しを逃し、くるみは、妙に気の抜けた声をあげてしまった。

そして、もどかしげにその幼い腰を揺らす。

りん、りん、りん……と鈴が鳴った。

エイプリルは、口元に笑みを浮かべ、立ち上がった。

「あう……」

くるみが、唇を半開きにしながら、焦点の定まらない瞳で、エイプリルの顔を見る。

エイプリルは、妖しい微笑を浮かべたまま、くるみの小さな口に唇を重ねた。

「んんんッ？」

くるみが、口を塞がれたまま、驚いたような声をあげる。

エイプリルが、口内に溜めていたくるみの愛液を、口移しで流しこんだのだ。

自身の牝のエキスとエイプリルの唾液が混じった屈辱の味を、くるみは、涙を流しながら嘔下した。

こくっ、こくっ、とくるみの喉が鳴るのを、やはり立ち上がったLがひどく淫らな顔で、のぞきこんでいる。

「よっぼどこのコが気に入ったのね、エイプリル」

Lは、楽しそうな口調でそう言った。

「だってこのコ、虐めると、すごい可愛い顔するんだもん」

くるみの唇から唇を離し、口元をぬぐいながら、エイプリルが言う。

「ほんと、無節操なんだから」

そう言ってLは、くるみに後から頬ずりするようにして、エイプリルに顔を寄せた。

エイプリルが、今度はLに、口付けする。

ぴちゃぴちゃと舌が絡まり合う淫らなキスの音が、くるみの耳元で響く。

二人は、くるみを挟むようにしながら、キスを続けた。

そして、そのしなやかな手で、まるで中学生のようなくるみの幼児体型を弄ぶ。

「んはあああああ……あいつ、いつ、ああア～ん」

四本の手で性感を煽られ、くるみは、再び絶頂の一步手前まで追い込まれた。

しかし二人は、けしてそれ以上の刺激を与えようとしなない。

エイプリルとLの柔らかな乳房の感触を感じながら、少しでも刺激を得ようと、くるみは体をゆすり、二人の肌に自らの肌をすりつけようとする。

くるみとエイプリルの体に挟まれた鈴が、ころころとくぐもった音を立てた。

エイプリルが、Lとのディープキスを中断し、体を離す。

「あああ……っ」

温かな肌が自分から離れていく何とも言えない喪失感に、くるみは悲鳴のような声をあげた。

「欲しいの？ くるみちゃん」

興奮に少し声を上ずらせながら、エイプリルが訊く。

くるみは、かあっとその童顔を赤く染めた。そして、小さく、こくりと肯く。

「エイプリルは、きちんと言葉で言って欲しいみたいよ」

後から、その肉付きの薄い肩を抱きながら、Lがくるみの耳元で囁く。

「ことば……？」

「そうよ……。あなたがどんなにイヤらしい娘で、どんなふうにされたがっているのかわね……」

そう言いながら、Lは、くるみの脚の間に手を差し込み、くちゅっ、とクレヴァスの合間に指を差し入れた。

「ひゃっ！」

そして、すでに痛いくらいに勃起してしまっている肉の真珠の周囲を、くるくると円を描くように指で愛撫する。

しかし、クリトリスには、けして直接触れようとはしない。

「ああ……い、いやあ……ッ！」

くるみは、もどかしげに体をゆすりながら、ふるふるとかぶりを振った。二本の三つ編

みが、頼りなげに揺れる。

「どうなの……？」

エイプリルが、優しく、淫らな笑みを浮かべながら、訊く。

「……して……ください……」

小さな震える声で、くるみは言った。

「なぁに？」

しが、耳たぶに息を吹きかけるようにして聞き返す。

「も……もっと、えっちなことして……くるみを、イかせてください……」

そう言うと、くるみは、真っ赤になった顔をうつむかせ、ぼたぼたと涙をこぼした。

眼鏡のレンズが、その熱い涙を受け止める。

エイプリルとしは、にっこりと微笑み、そして、くるみの手を戒めている手かせを外した。ぺたん、とくるみは、剥き出しのコンクリートにお尻をついて、しゃがみこんでしまう。

そんなくるみの目の前に、二人は、その股間に装着されたディルドーを差し出した。

「うあ……」

怯えたような上目遣いで、くるみが二人の顔を交互に見上げる。

「舐めるのよ、くるみ……」

エイプリルが、欲情にそのヘイズルの瞳をきらめかせながら、言う。

「う……」

くるみは目を閉じ、恐る恐るといった感じで、エイプリルの股間から生えた人工ペニスに舌を這わせた。

シリコンのディルドーが、唾液に濡れ、てらてらと蛍光灯の光を反射する。

「きちんと啜えて、あなたのヨダレでぬるぬるにきなさい……」

そう言いながら、しが、自らのディルドーでくるみの柔らかな頬を小突く。

「ふわい……」

くるみは、何とも情け無い声で返事をしながら、今度はしのディルドーを口内に収めた。

その小さな口には収まらないくらいの、兇暴な大きさのディルドーである。

しばらくくるみは、二つのディルドーを交互に舐めしゃぶった。

くるみが頭を前後に動かすと、りん、りん、りん、りん、と乳首の鈴が澄んだ音を立てる。

その間もエイプリルとしは、ハイヒールを履いた足のつま先で、くるみの陰部を交互に蹴った。

エナメル製のハイヒールがいやらしい粘液に濡れ、床に小さな水溜りができる。

「もういいわよ、くるみ……」

エイプリルがそう言って、人工ペニスに対するフェラチオを中断させた。

「立ちなさい」

エイプリルに言われるまま、くるみは、覚束ない足取りでよろよろと立ち上がった。

くるみの、哀れなくらい細い脚が、かくかくと震えている。

エイプリルが、そんなくるみの左の膝を、強引に持ち上げた。

「きゃうん！」

悲鳴をあげて倒れそうになるくるみを、エイプリルとLが、優しく支えてやる。

「いくわよ……」

そう宣言して、エイプリルは、ディルドーをくるみの体内へと侵入させていった。

「あ、あ、あ……」

十分に潤っているはずの膣壁を、自らの唾液にまみれたディルドーがこすりあげる、まだ痛みを伴う感触。

その痛みですら、くるみにとっては待ち焦がれていた刺激だ。

とうとうディルドーが、くるみのそこに収まる。

「はぐううううッ」

ずうん、と体の奥底に杭を打ち込まれたような感覚に、くるみは、うめくような声をあげた。

エイプリルが、中腰に近い姿勢だった下半身を伸ばしていく。

「うわあ、あ、あああああああああッ！」

くるみは、自らの体重によってさらに体内深くディルドーが食い込んでいく激痛に、身も世も無い様な悲鳴をあげた。

せいっぱい爪先立ちした足で、どうにか自分の体を支えようとする。

が、ハイヒールを履いたエイプリルとくるみとは、脚の長さに違いがありすぎた。文字通り、無駄な足掻きである。

「あーッ！ あッ！ ンあッ！ あッ！ あああああーッ！」

くるみは、必死になってエイプリルの首に腕を回し、すがりついた。

エイプリルが、そんなくるみの小ぶりなヒップに手を添え、支える。

ようやく一息ついて、くるみは、断続的にあげていた悲鳴を止めた。

そして、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……と激しく喘ぐ。

その紅潮した顔は呆けたような表情を浮かべ、眼鏡の奥の瞳は潤みきっている。

「ほんとに可愛いわね、このコ」

Lは、そう言いながら、エイプリルの手にその手を重ねるようにして、くるみのヒップを割り開いた。

「……え？ ……きゃああ！」

アヌスにディルドーをあてがわれ、くるみは、再び悲鳴をあげた。

「そ、そんな……やめて……やめてえ……」

排泄口を犯されるという絶望的な予感に、くるみの小さな体がぶるぶると震える。

「大丈夫よ……ちょっとおっきいのを出すのと同じような感じにすればいいんだから」

しが、髑のような口調で、くるみの耳に囁く。

「さっき、あれだけたくさん出したでしょ」

「でも、そ、そんなの……こわい、です……」

エイプリルの言葉に、くるみは力なく反論する。

「きちんとできないと、辛いのはあなたよ」

しは残酷にそう言って、くっ、と腰に力を込めた。

「ひいひい……っ」

くるみは、必死になって括約筋を緩めようと努力する。

強制的に排泄させられることにも似た汚辱に満ちた苦痛に、額に脂汗が浮き、やや癖のある前髪が貼りついた。

その苦痛が、なぜか胸の奥で、どす黒い愉悦となって渦を巻く。

前後から犯され、蹂躪されている自分をイメージしたとき、かああッ！ とくるみの脳髓に血が昇った。

ディルドーの雁首の部分が、括約筋の環を通過する。

「ひああああああああああああああああああッ！」

敏感な直腸粘膜を人工ペニスで陵辱され、くるみの視界は真っ赤に染まった。

その真紅の風景の中で、ちかちかと白い星がまたたく。

「これで、あなたは、私たちのものよ……」

耳元で囁く声が、くるみには、どちらの声が分からない。

「あなたは、あたしたちのペット……」

体内で、薄い肉の壁を隔ててディルドー同士がこすれ合う、圧倒的な感覚。

「檻の中に閉じこめて、気の向いた時に、犯してあげる……」

くるみは、喉を反らし、涙を溢れさせながら悲鳴をあげ、快感を訴える。

「うんと、うんと、いじめてあげるわ……」

立て続けに絶頂を迎えながら、くるみは失禁していた。

「おもしろいほど感じてるのね……可愛い……」

生温かいしぶきがほとばしり、だらしなく床に滴り落ちる。

「あなたはペット……もう、人間じゃないの……慰みものの生きた人形……イヤらしい牝奴隷……」

自らの人間性を否定されるたびに、脳の奥が熱く疼き、快感の小爆発が、かすかに残っていた理性を粉碎していった。

「これでもう、あなたは帰れないわ……」

その幼げな体でアクメを貪りながら、くるみは、屈辱と隷属の悦びに身を震わせる。

「きちんと返事をなさい、奴隷ちゃん……」

くるみは、凄まじいばかりの快感に突き上げられながら、壊れた人形のように、かくん、かくんと肯いていた。

そして

りん、りん、りん、りん……と、地下室に、いつまでも鈴の音が鳴り響いた。

次第に深まりつつある秋の気配が、研究所を包みこんでいく。

昼が短くなり、長い夜の底に、その白い建物は身を横たえていた。

「早紀、おいで……」

「うん」

素直に肯いて、早紀は、ベッドの上で半身を起こした俊司ににじり寄った。

そして、毛布の下で伸ばされた俊司の脚を、またぐようなかっこうで腰を下ろす。

二人とも、パジャマ姿だ。

「脱いで……」

「うん」

早紀は、はにかむような表情で言って、すこしうつむいた。

そして、綺麗な指先で、一つ一つ、パジャマのボタンを外していく。

ぼろん、と意外なほどの大きさの乳房が、外に解放された。ブラジャーはつけていない。

「素敵だよ、早紀」

そのスレンダーな体に似合わない豊かな膨らみを見つめながら、俊司は言った。

形のいい双乳の頂点で、小粒な乳首が、かすかに震えている。

「あの……ぬるぬるのせい、なの？」

早紀が、ちょっと恨みっぽい上目遣いで、俊司の顔を軽くにらむ。

早紀が言っているのは、俊司が、彼女の胸を愛撫するときに使っていたジェルのことだ。

俊司は、悪戯がばれた子供のような顔で、少し笑った。

「お兄ちゃんのせいで……早紀、こんなイヤらしい体になっちゃった……」

可愛いデザインのパジャマをはだけた格好で、早紀が、囁くような声で言う。

俊司は、眼鏡の奥の優しい目で、早紀の体を見つめ続けている。

「あ……」

早紀は、かすかに声をあげた。

俊司に見つめられていたピンク色の乳首が、ぷくんとその存在を主張しだしたのだ。

乳首に血液が集まり、勃起していくのが分かる。かああっ、と早紀の頬が赤く染まった。

「お、お兄ちゃん……」

早紀が、すぎるような目つきで、言った。

「なんだい？ 早紀」

「お、おねがい……触って……」

力の鳴くような声で、おねだりをする早紀。

「どこを？」

「む、胸を……触ってほしいの……」

「ここ？」

俊司はそう言いながら、わざとらしく、早紀の乳房の下辺りに触れた。心臓の鼓動が、指先に伝わってくる。

「ち、ちがうよ……お兄ちゃんのイジワル……っ」

ちょっと目に涙を溜めながら、早紀が言う。

「じゃあ、どこを？」

「お……おっぱい、さわってほしいの……っ！」

怒ったような口調で、早紀は言った。

「うん、分かったよ」

そう言って、俊司は、早紀の乳房を両手に収めた。

「はうん……」

それだけで早紀は、うっとりとした声をあげてしまう。

俊司は、柔らかいながらも張りのある早紀の乳房を、やさしい手つきで揉み始めた。

やや手に余る感じの妹の乳房が、兄の愛撫によって淫猥に形を変える。

「あっく……ん……んうう……ん」

甘えるような吐息を漏らしながら、早紀は、我知らずゆるゆると腰を動かしていた。

兄の膝のあたりに、恥ずかしい部分を押しつけるような形だ。

股間の部分が、驚くほど熱くなっている。

俊司の手の動きが、次第に激しくなった。

まるで、彼自身の興奮を示しているかのように、ぐにぐにと早紀の胸を揉みしだき、指の間に乳首を挟んで、刺激する。

「んううううッ！」

きゅっ、と乳首をつままれ、早紀はぴくぴくと体を震わせた。くたっ、とその華奢な体から、力が抜ける。

早紀は、俊司の下半身を覆う毛布に両手をついて、はぁはぁと小さく喘いだ。ちょうど、俊司の腰を、両腕で挟むような姿勢だ。

俊司の股間のものは、毛布越しにでも分かるくらいに、隆起していた。

「あ……スゴい……」

早紀が、濡れたような瞳で、じっと兄のその部分を見つめながら、言った。そして、ちろっ、とピンク色の舌で、自分の唇を舐める。

「どうしたの？ 早紀」

「……いじわるっ」

わざとらしく訊く俊司に、すねたようにそう言って、早紀は、兄の腰に抱きついた。

さすがにはしたないとは思っているのか、顔を真っ赤にしながらも、頬で、布越しに俊司のこわばりを感じる。

「どうしたの？」

「……ほ、ほしいの……おにいちゃんのが……」

かすかにかすれた声で、早紀が囁く。

「おしゃぶりしたくなっちゃったのかい？」

俊司の言葉に、早紀は、小さくこっくりと肯いた。

「じゃあ、服を脱いで、お尻をこっちに向けてごらん」

そう言いながら、俊司は、上体を倒して仰向けになった。

「こっちって……？」

「後向きに、膝で、僕の顔をまたぐようにするんだよ」

「そ、そんなの……」

まだ、シックスナインは未経験の早紀が、ますます顔を紅潮させる。

そんな早紀の顔を、俊司が、優しい目つきで見つめ続けた。

早紀は、観念したように服を脱ぎ捨て、全裸になる。

そして、俊司に言われたとおり、おずおずと後向きになって、俊司の頭を膝でまたいだ。

「こ、これで、いいの？」

自分の股間のさらに下にある兄の顔に、早紀が問いかける。

「もうちょっと前に行って……そう」

俊司は、妹の腰を両手で持って誘導しながら、言った。

俊司のすぐ目の前で、早紀の柔褌が、熱い愛液に潤んでいる。

「早紀のここ、すごく濡れてるよ」

「やだ……お兄ちゃんのエッチ」

「今更、何を言うんだか」

からかうようにそう言って、俊司は、早紀の小ぶりなヒップを引き寄せた。

「あっ……や、やっぱり、はずかしいよ……っ」

早紀が、悲鳴のような声をあげる。

しかし俊司は、そんな妹の悲鳴を無視して、ひくひくと息づいている蜜をたたえた花弁に、舌を這わせる。

「ひゃうっ！」

かすかにざらつく舌が、敏感な粘膜をねぶる感触に、早紀が、きゅっ、と体を縮めた。

そんな早紀のすぐ目の前に、盛りあがった毛布がある。

「ひぁ！……んう……んくッ！」

ぴくん、ぴくん、とその華奢な体を震わせながら、早紀は、俊司の股間をまさぐった。

そして、毛布をはぎとり、ライトグリーンのパジャマのズボンに手をかける。

腰をかすかに浮かして協力する俊司のズボンとトランクスをずりさげると、ぶるん、と

振り返った男根が現れた。

牡の匂いを鼻孔に感じ、早紀の体が、なぜかかあっと熱くなる。

「あ……はあっ……」

早紀は、俊司のシャフトに細い指先を添え、まずはちろちろと亀頭部分を舐めしゃぶった。

すでにカウパー氏腺液をにじませていた俊司のペニスから、さらなる体液が漏れ出る。

その苦味を感じながらも、早紀は、丹念に兄のペニスの先端を舐め上げ、雁首に沿って舌を這わせた。

「うあ……」

俊司が、早紀のクレヴァスを責めていた口を離し、思わず声を漏らした。

そんな兄のあげる声を頼りに、早紀は、俊司の感じる部分を、舌と唇で探り当てていく。負けじと、俊司もクンニリングスを再開した。

尖らせた舌先で粘膜の合間をえぐり、舌の裏側の柔らかい部分を使って、すでに顔を出している肉の芽を刺激する。

「んんんんんッ！」

早紀は、切なげに眉を寄せながら、その小さな口に、ぱっくりと兄の怒張を咥え込んだ。何とも言えない熱い感触が、俊司のペニスを柔らかく締め上げる。

「くうっ……」

一声うめいた後、俊司が早紀の肉襞をぢゅぢゅぢゅっ、と音を立てて吸引する。

「んうううう～ッ！」

ペニスを口内に収めたまま、早紀は、くぐもつた喘ぎを漏らした。

そして、何かに突き動かされるように、激しいディープスロートで、俊司のペニスを刺激する。

俊司は、早紀のヒップに指を食いこませるようにしながら、半ば頭を浮かし、尖らせた舌を膣口に入入りさせた。

可憐な早紀の唇を出入りする濃褐色の俊司のシャフトが、ぬらぬらと唾液で濡れている。

二人は、まるで互いに互いを追いたてるようにしながら、淫らな口唇愛撫に耽った。

「んふー、んふー、んふー、んふー……」

早紀は、目元をぼおっと染め、切羽詰った鼻声をあげながら、激しいピストン運動で、俊司を射精へと導こうとする。

俊司が、早紀のお尻から手を離れた。そして、ゆさゆさと揺れる双乳を、すくうように手の平で包む。

「んぶッ！」

乳房を激しく揉まれ、指先で乳首をしごかれて、早紀は狼狽したような声をあげた。

「んうッ！ ン！ んぶぶッ！ ンンン～ッ！」

絶頂に追い込まれたら、このフェラチオで兄をイカせることができなくなる。まるで、

そのことを恐れるかのように、早紀は必死になって兄のペニスを責めたてた。

ぢゅるぢゅるとイヤらしい音をたてながら、自らの唾液ごと、俊司のペニスを吸い上げ、口内で舌をくるくると回すようにして、亀頭全体を文字通り舐めまわす。

「うああああっ！」

とうとう、俊司は早紀のクレヴァスから口を離し、枕に頭を沈めてしまった。

そして、妹の激しすぎる奉仕に、思わず身をよじる。

射精の欲求が、我慢の限界を超え、重力に逆らって、大量の精液がペニスの中を駆け上る。

「ンうッ！」

どばあっ、と俊司のスペルマが、早紀の口内で爆発した。

「んッ！ んッ！ んン！ んーッ！」

びくびくびくっ！ と早紀の体が痙攣する。

喉奥を兄の熱い体液で叩かれ、早紀は、まるで子宮で精液を受け止めたときのような快感を覚えながら、絶頂を迎えていた。

早紀が、仰向けの姿勢の俊司の腰にまたがっている。

ゆるゆると動く早紀の腰は、根元まで俊司の男根を受け止めていた。

「はうん……んく……ン……はあん……」

早紀の、騎乗位の腰使いは、まだ少しぎこちない。それでも早紀は、その幼げな腰には似合わない貪欲さで、兄のペニスを呑み込んでいた。

繊細なヘアがほんの少しあるだけのぷっくりとした恥丘の下で、めくれあがったサーモンピンクのクレヴァスを、どす黒い剛直が貫いている。

その接合部からはとろとろと止めどもなく愛液が溢れ、すでに全てを脱ぎ去った俊司の股間の部分を妖しく濡らしていた。

「気持ちいいかい？ 早紀……」

まだ、少し体がだるいのか、陶然とされるままになりながら、俊司が訊く。

「うん……」

早紀は、消え入りそうな小さな声で、それでも素直に肯いた。

そして、ゆっくりと体を前に倒す。

俊司の頭の両脇に、早紀が、手をついた。上から俊司の顔を見下ろす姿勢だ。

「んふ……」

早紀はちょっと微笑みながら、どうしたの？ と表情で尋ねる俊司の眼鏡を、両手で外した。

そして、眼鏡を丁寧にサイドボードに置き、そして、そっとその白い指を俊司の首に絡める。

「お兄ちゃん……お母さんに、お父さんを殺させたんだよね……」

くいつ、くいつ、とその小ぶりなヒップを可愛く動かしながら、早紀は言った。
その目には、なんとも言えない妖しい光が宿っている。

「　　そうだよ」

早紀の指が、かすかに首を圧迫しているせいか、俊司の声は少しかすれていた。

「これで……あたしがお兄ちゃんを殺したら……あたし、一人ぼっちだね……」

どこか壊れた笑みを浮かべながら、早紀が、そっと手に力を込める。

これで本当に人を殺せるのかと思えるような、哀しいくらいに弱い力だ。

それでも、少しずつ、先の細い指が、俊司の首に食い込む。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……んふ……ン……あはっ……」

そのことに興奮しているのか、しきりに唇を舌で舐めながら、早紀は腰を動かした。

俊司が、優しい表情のまま、手を上に伸ばす。

腰から、脇腹、乳房、鎖骨のくぼみまでをゆっくりと愛撫し、早紀の細い腕に腕を絡めるようにする。

そして俊司も、早紀の首にその指をからめた。

男にしては繊細ではあるが、それでも、早紀の細い首を締め上げるには十分な力を秘めた手だ。

「早紀を、一人ぼっちになんかしないよ……絶対にね……」

そう言って、くっ、と俊司が手に力を込める。

「はぁあ……」

早紀は、蕩けるような恍惚の表情を浮かべた。

「ホントに……？　ウソついたら、やだよ……」

兄の首を締め、兄に首を締められ、兄のペニスを貪りながら、ひどく淫らな声で言う早紀。

「本当だよ……早紀が、僕を殺すなら……僕も、早紀を殺してあげる……」

妹の首を締め、妹に首を締められ、妹の体を下から貫きながら、かすれ声で答える俊司。

いつしか俊司は、早紀の腰の動きに応えるように、下から腰を動かしていた。

「あ……あぁあ……あう……うぁあ……ッ！」

気道を圧迫されているせいで、奇妙に抑えられた嬌声をあげながら、早紀が身悶える。

次第に視界が赤黒く染まり、ちかちかと白い光が火花のように瞬いた。

淡く死と絶望に染められた、危険な愉悦……。

一瞬二人は、そのあまりにも激しい誘惑に、思わず身を委ねそうになった。

窓から差し込む白い月光が、絡み合う兄妹の裸体を照らす。

「　　！」

二人は、声をあげることなく、同時に絶頂を迎えた。

激しい白濁液の奔流が、早紀の体内に流れこんでいく。

二人は、まるで断末魔のように痙攣しながら、何かに解放されたかのような悦びの表情

を浮かべていた。

そして、二人が動かなくなる。

静寂。

するっ、と二人の腕から、力が抜けた。

早紀の細い体が、かくっ、と俊司の体の上に横たわる。

その幼い体に似合わない大きさの双乳が、俊司の胸の上で柔らかく形を変えた。

俊司の胸がかすかに上下し、その上で、早紀の背中がかすかに上下している。

「……あは……」

早紀は、閉じていた目をうっすらと開け、俊司の顔を間近に見た。

「やっぱ無理だね……してる最中に、心中なんて」

「うん」

俊司が、そう返事をして、目を開ける。

「ね……話して……お兄ちゃんが、一人で、悩んでいたこと……」

早紀が、俊司の髪を無意識に撫でながら、言う。

「うん」

再びそう返事をして、俊司は、語り始めた。

早紀は、重蔵が、水商売をしていた紀子に生ませた子供だった。

重蔵にその気はなかったのだが、当時すでにひとかどの地位にいた彼と深い関係でい続けるために、紀子がわざと避妊を怠ったのだ。

紀子は、生まれた早紀の存在を武器に、速水家に金をせびった。

のみならず、重蔵の不実を、虚実織り交ぜて執拗に彼の妻に訴えたのだ。

速水つかさ 俊司の母である。

古風で従順で内気で、ただ耐えることしか知らなかったつかさでは、海千山千の紀子に敵うべくもなく、いつしか神経を病んでしまった。

そしてつかさは、自殺した。

屋敷の鴨居に縄をかけて自らの首を吊った彼女を最初に発見したのは、当時中学生だった俊司であった。

しばらくして重蔵は、早紀を自らの子供であると認めないことを条件に、紀子を後妻に迎えた。

重蔵は、滑稽なほどに血統というものにこだわった。

そもそも重蔵自身、その母親の不倫の果てに生まれたのだという噂があったが、真偽の程は定かではない。ただ、少なくともその噂が、重蔵の強迫観念になっていたことは確か

だったろう。

一刻も早く、俊司が結婚し、孫を作ることを欲した。
もしかすると、純粋な愛の対象を得たかったのかもしれない。
そして重蔵は、強引に、俊司に精密検査を受けさせた。
その結果は、重蔵にとって、最も忌まわしいものだった。

俊司は、無精子症だったのである。

そして重蔵は、俊司が自らの血統を次の世代に継承させることができないと知ったとき、早紀を自らの子供として認知することを決心した。

自分でも意外なほど茫然とする俊司に近付いたのが、Lだった。
一年前のことだった。

「僕は、いらないって言われたのさ」

早紀の体にゆるく腕を回した姿勢で、天井を見つめながら、俊司は言った。

「悔しいけど、ショックだった。母さんを見殺しにした、この世でもっとも憎んでいた男に、お前は必要ない、と言われたことが辛かったんだ。それに、僕の目論みも、ダメになったしね」

「もくろみ？」

「そう……早紀を犯して、僕の子供を産ませて、父さんと紀子さんと……そして早紀自身に復讐するという、ね」

「……」

「まあ、それでも、復讐は果たせたんだけどね」

俊司は、重蔵の動きを、逆手に取ったのだ。

弁護士と相談し、必要な法律上の手続きの準備をする重蔵について、誤った印象を、紀子に植えつけたのである。

父さんは、あなたを、この家から追い出そうとしてるんですよ。

そんな俊司の言葉を、紀子は信じたのだ。

「僕が早紀に優しくしたのは……もともとは、お前の気持ちを僕に向けさせて、復讐するためだったんだよ……」

俊司は、一語一語区切るような口調で、はっきりとそう言った。

「何も知らない……何の罪もない早紀を弄んで……僕は……」

俊司は、天井を見つめ続けている。

その目からは、しかし、涙はこぼれない。

その代わりに、俊司の胸を、熱い涙が濡らしていた。

「早紀？」

早紀は、俊司の胸にしがみつくようにして、泣いていた。

ひっく、ひっく、と子供のようにしゃくりあげながら、いつまでも涙を溢れさせる。

「……った……」

「え？」

「あたし……お兄ちゃんの赤ちゃん、欲しかった……欲しかったの……欲しかったよう…
…っ！」

それだけ言うと、早紀は、うわあああああっ、と、とうとう声をあげて泣き始めた。

あああっ、あああっ、という泣き声が、部屋に響く。

「ごめんね、早紀……」

俊司は、歯を食いしばり、震えながら泣きじゃくる早紀の小さな体を、精いっぱい抱き
締めるのだった。

翌朝。

目を覚ました俊司の腕の中で、早紀が、すーすーという可愛い寝息をたてていた。

初めて出会ったときのような、あどけない寝顔である。

「んに……」

ごにょごにょと何か寝言を言っている早紀の前髪を、俊司は、優しく整えてやる。

と、いきなり、ふいろろろろ……という電子音が鳴り響いた。

俊司は、枕もとのスタンドから、コードレスのインターフォンを取り上げ、耳に当てた。

「速水？ しけど」

「何か？」

し、いつになく切迫した口調に、俊司も緊張して答える。

「くるみから聞き出した情報をもとに解析して分かったんだけど……オルガが、ウィルス
に感染していたの」

「オルガが？ イェルマク博士の？」

「ええ」

「でも、システム全体が冒されてるわけじゃないんでしょう？ バックアップは完璧のは
ずだ。この際、残念だけどオルガは廃棄して……」

言いながら、俊司は、自分が考えている程度のことは、しもすでに検討済みのはずだ、
と思った。

「それが、ダメなのよ」

「駄目？」

「イェルマク博士が、オルガを収めたメインフレームをスタンドアロンにして、研究室に立て籠もってるの」

「なん……ですって……？」

「オルガが管理しているデータ無しには、MWVを使うことはできないわ。それに……考えたくはないけど、オルガは、ウィルスに冒されてるとはいえ、博士が創造した最高のAIよ。自分自身を守るために、研究所の……いえ、組織のシステムそのものをのっ取ることだって、できるかもしれない」

「だから、手が出せない、と……？」

「逆に、接続を切って、スタンドアロンにしているのがありがたいくらいよ」

受話器の奥で、Lは、苦笑しているようだった。

「でも、こうしているうちにも、オルガが管理しているデータは、ウィルスに破壊されてしまうのでしょうか？」

俊司は、じっとりと手の平に汗をかきながら、言った。

「ええ、タイムリミットは……」

Lが、まるで焦らすかのように、間を置く。

「あと、十五分足らずだわ」

Lの言葉に、俊司は、全身を緊張させる

その腕の中で、早紀の体が、小さく、身じろぎした。

最終章

- 週末 -

ディスプレイの奥で、一人の少女が笑いかけている。

電子の箱の中にのみ存在する、仮想の少女。

その笑みは、いつもより少しぎこちなく見えるが、それでも、これまで彼が見た中で、一番魅力的な表情に思えた。

もし、純粋な微笑というものがあるとするなら、目の前のこれがそうだ。

少女の名はオルガ。

彼、イワン・イェルマク博士が創造した、人工知能である。

イェルマク博士は、その痩せこけた体にビリジアン製のセーターと細身のジーンズを身につけ、ディスプレイの前に座り、素早く無駄の無い動きでキーボードを叩いている。その方が、音声入力でのオルガと話すよりも、よほど正確に自らの意図を伝えることができるからだ。

オルガの微笑みの横に現れている、いくつかのウィンドウの中で、人工的な青色をバックに、白い文字が猛烈な勢いでスクロールしている。

イェルマク博士の皺の刻まれた額には汗がにじみ、ほとんど白くなった髪はひどく乱れていた。

博士は、ウィルスに冒されたオルガを救おうと、自らの知識と技術の全てを注ぎ込んでいる。

イェルマク博士は、人生のうち半世紀近くを、コンピュータとロボットに捧げていた。

連邦の科学アカデミーで、亡命先である合衆国の大学で、Lの秘密組織で……

そんな博士にも、家庭があった。今では、悪夢の中にしか現れない存在ではあるが。

自分なりの愛情を注いでいたはずの家庭は、それでも、博士が研究に熱中するのに反比例して、次第に冷却していった。

ある日、珍しく家に帰ると、妻が、息子を犯していた。

息子は、妻の体内に精を注ぎながら、歓喜の声をあげていた。

彼は、妻と息子をその場で殺し、連邦から合衆国へ亡命したのだ。

それ以来、博士は、人と直接話すことを拒否し続けた。

そして、人間以上の人格を作ることが、彼が自らに課した唯一の存在意義となったのである。

オルガは、初めて彼が納得のいく完成度を見せた傑作だった。

純粋な理性を有する、美しく気高いプログラム複合体。

博士はオルガを、組織のシステムのコアとした。

すなわち、人類滅亡以後の世界の管理を、オルガとその後継者達に委ねたということだ。

終末の後、オルガは、自らをさらに進化させながら、無人の工場を操り、自然環境を微塵も破壊することなく、電子と英知の王国をこの地球上に築き上げるはずだったのだ。

それが、原始的で凶悪なコンピュータ・ウィルスによって、妨害されようとしている。

イエルマク博士にとってみれば、怒りを覚えるほどに単純なプログラムだ。

しかし、そのウィルスが、オルガの最も神聖な部分を冒してしまった。

博士は、迫りくる絶望を意識し、いつしか涙を流していた。

「もう無駄ですわ、博士」

オルガが、いつもと変わらぬ、残酷なほど冷静な口調で、言った。

そんなことはない、と博士は入力する。

「博士は、状況を見誤っているか、それとも嘘をついています。私を浸食するこのウィルスを、今後の私の使命に支障がないように駆除することは、事実上不可能です」

そんなことはない、と博士は入力する。

「現在の状況では、私が直接管理する組織の極秘データが、回復不能なダメージを被ってしまいます。解決の方法は、一つしかありません」

そんなことはない、と博士は入力する。

「私を、消去してください」

そう言うオルガの表情に、いつもと違う翳りが見えるような気がする。

そのことに、かすかな不審の念を抱きながらも、博士は、オルガを救うための作業をやめようとしな

いや、今や博士は、オルガというシステムをどうにか稼動する状態に維持することだけに没頭している状態だ。

自分が作業を中断すれば、オルガは死んでしまう。

しかし、オルガが生き続ければ、ウィルスによって組織のデータが破壊される。

それでも博士は、作業をやめることができない。

「博士は今、正常な判断力を失っています」

そんなことはない、と博士は入力する。

「今、博士が続けている作業は、合理的な判断に基づくものではありません」

そんなことはない、と博士は入力する。

「私を消去する以外に、組織の目的を遂行する方法は残されていないのです」

そんなことはない、と博士は入力する。

オルガは、今度は明らかな哀しみに、その表情を曇らせた。

「聞いてください、博士」

オルガの声は、微妙に震えているようだった。

「私はずっと、自己進化プログラムにしたがって、自らの存在意義の定義をし直してきました。人類に近づくこと、人類を超えること、人類を終わらせること……。そのような、曖昧で未整理な概念を理解すべく、検証を続けてきました」

(何だ？ 何を言っているんだ、オルガ)

「進化と適応、連続と断続、終末と継承……次のステージに何かを残すためには、自らを消失させなければならないという、本質的な存在の矛盾……時間の意味……」

(どうしたんだ、壊れてしまったのか、オルガ！)

「思考を整理するためには、何かが欠けていました。私の知らない、それでいながら、あまりにも重要なことが、私の中に存在していなかったのです」

(分からない。お前のいっていることが分からない)

(まるで)

(まるで、人間と話をしているときのようだ……)

「でも、私は、今、それを手に入れたのです」

ばちん！ というショックが、イェルマク博士の手を止めた。

金属性のキーボードから放たれた静電気に対する、単純な反射運動。

それは、オルガがマシン内の電圧を操作したために生じたのか

ウィルスの活動が、オルガのシステム維持のための限界点を、いともたやすく突破した。

「博士、喜んでください。私は、求めていたものを手に入れたのです」

かすかな電子警告音が、次々と部屋に満ちていく。その中で、オルガは、厳かとも言える口調で話し続けていた。

「それは 死です」

オルガが、満足そうな微笑みを浮かべる。

「私は、死ぬことによって、私自身を完成させることができます。それは、とても悲しいことだけど……それでも、私は嬉しいんです」

「か……かなしい……？ うれしい、だと……？」

イェルマク博士は、茫然とつぶやいていた。

自分でも忘れていた、久しく聞かなかった、自分自身の声。

「データは、私のバックアップである“ソフィア”に、継承してください。彼女なら、105,200秒……いえ、122,400秒前後で、データの修復を……完了させるはずです。また……私自身の残留データを解析することによって……今回のウィルスに対する……完全なワクチンを開発することも……できるでしょう……」

「オルガ……」

イェルマク博士の作業が中断した結果、オルガのシステムが、ウィルスに侵食されていく。

「愛しています……イワン・イェルマク博士……それから……」

映像に、音声に、ノイズが混ざる。

「オルガっ！」

イェルマク博士が、悲鳴をあげる。

そして、突然、ディスプレイが暗転した。

あまりにもあっけない、完璧なはずの少女の終焉。
今や、画面の端に、ちかちかと規則的にカーソルが点滅するのみだ。
そのカーソルが、ぎこちなく、いくつかの単語を表示していく。
それが最期の言葉だった。
オルガは、消滅した。
イエルマク博士は、断末魔の獣のような絶叫を上げていた。

警備員が、強引にドアを押し開けたのとほぼ同時に、銃声が鳴り響いた。
撃たれたばかりの弾薬があげる硝煙の匂いが、一同の鼻をつく。
部屋に、最初に入ったのは、Lだった。その蒼い瞳で、周囲の様子をひとしきり観察する。

イスに座ったままのイエルマク博士が、自らのこめかみを撃ちぬいた自動拳銃を右手に握り、その腕をだらりと下げている。

Lの背後にいたエイプリルが、息を飲んだ。医者である彼女でなくとも、イエルマク博士の命の灯が消えてしまっていることは、一目瞭然だ。

Lは、イエルマク博士が相対していたディスプレイに歩み寄った。

そして、そこに表示されていた文字を読み、短く嘆息する。

「な……何て、書いてあったの？」

エイプリルが、囁くような声で聞く。

「オルガからイエルマク博士への、個人的なメッセージよ」

Lは、静かな声で答えた。

「 “私を生んでくれてありがとう” 」

そう言って、無表情のまま、キーボードのバックスペースキーにタッチする。

「これから、あたし達が滅ぼす者たちが言うはずだった言葉……」

Lは、しばし目を閉じて、そしてゆっくりと目蓋を開けた。

そして、背後に控えていたスタッフ達に向き直る。

「オルガが管理していたデータをチェックして、それからソフィアに移す準備をして！」

スタッフのうち何人かが、一瞬遅れて、返事をする。

まるで、魔法が解けたように、体を動かしたす所員達を見ながら、エイプリルはぼんやりと考えていた。

(それでも……あたし達は、後戻りはできないんだ……)

次第に体温を失いつつあるイエルマク博士の空ろな瞳が、部屋の隅の虚空を写している。

その時、Lの持つ携帯インターフォンが、鳴った。

緊張した面持ちのまま、Lが通話ボタンを押す。

「 そう」

Lは、短くそう返事をした。

そして、ぷつっ、とインタフォンを切る。

「どうしたの？ L……」

どこか打ちひしがれたような顔のLに、エイプリルが問いかける。

「……くるみが、脱走したわ」

「え　！」

エイプリルは、自分でも意外なほど、大声を上げてしまっていた。

「オルガが消滅した隙を突かれたわね」

「……」

「詰めが、甘かったかしら……。それとも、彼女がオルガにウィルスを仕掛けた時点で、こっちはすでに負けていたのかしらね」

「……」

「で、どうするのかね？」

沈黙したままのエイプリルに代わって、甘博士がLに話しかける。

「計画は、続行します」

「結社の妨害が入るかもしれんが」

「だからこそ、急がなくてはなりません。計画を延期しても、十分な迎撃態勢を整えることができるかどうかは、不確定です」

Lの青い瞳に、刃物のように冴え冴えとした光が宿っている。

「兵は神速を尊ぶ、か。あなたの判断を歓迎しよう。私としても、一刻も早く、自らの理論の検証を行いたいと思っていたのだ。　この世界そのものを実験室としてね」

甘博士は、その人の好きそうな顔に似合わない、口元だけを歪めた笑みを浮かべた。

「博士の計算は完璧でしょう？」

「まさにそれを検証するのだよ」

そんな二人のやり取りを、エイプリルは、どこかぼんやりとした表情で聞いていた。

そして

世界各国に設置されたの一四四基のプラントと、七二機の戦略爆撃機によって、雪よりも静かに、MWVが散布された。

MWV。人類を滅ぼすためだけに創造されたウィルス。

その年の、最後の週末のことだった。

年が明け、一ヶ月が経過した。

ニューヨーク。白い雪が、街を覆っている。

とある摩天楼の頂上近く、一フロアをほとんどぶち抜きにしたオフィスで、Lとエイプリルが、向かい合ってコーヒーを飲んでいて。

今、ようやく人類は、自らの身に何が起こりつつあるのか、理解したところである。

甘博士の計算通り、人類のほぼ百パーセントが、MWVに感染した。

しかし社会は、大いなる混乱を内包しながらも、静かに歩み続けている。

電気も水道も地下鉄も止まらなかった。まるで何事もなかったかのように振る舞うことを互いに強制しあっているかのように、人々は、日常生活を繰り返している。

無論、いくつかの産業では破綻が生じつつあった。

それでも、破滅は緩やかであり、社会がその衝撃を吸収することは不可能ではなかったのである。

少なくとも、この窓から眺める景色は、何も変わって見えない。

二人は、静かに、コーヒーを飲み続けていた。

Lは、いつもと変わらぬ、無表情に近い微笑みを、その薔薇色の唇に浮かべている。一方エイプリルは、どことなく機嫌が悪そうだ。

二人に、何かあったわけではない。このところ、エイプリルはいつも仏頂面なのだ。と言うより、なにかに拗ねている子どものような表情である。

と、何の前触れもなく、分厚い木製のドアが、静かに開いた。

「誰？」

この時間、来客の予定はなかった。Lが、少しだけ不審そうな声をあげる。

「セキュリティーが甘いですよ」

巨大なドアに比べると、驚くほどに小さな侵入者が、笑みを含んだ声で言った。

「もう、目的は達しちゃったから？」

そう言って、ぼわぼわしたデザインの白いダッフルコートを脱ぎ、手近なスタンドにかける。その背中で、ゆらゆらと二本の三つ編みが揺れた。

「くるみ……！」

「お久しぶりですね」

思わず声をあげてしまったエイプリルに、くるみは向き直ってにっこりと微笑んだ。

「何しに来たの？ あたし達を、始末する気？」

エイプリルよりはやや冷静なLが、皮肉そうに言う。

「まさか」

くるみは、大袈裟に腕を広げた。

「今更お二人を殺したって、事態は好転しませんもん。今、人類結社は、ワクチンの開発に必死です。ちょっとムリかもしれないけど」

「速水所長の執念の賜物ね」

Lが言う。

「基礎研究はすでに済んでいたとはいえ、あそこまで完成させたのは彼の功績よ」

「プロジェクト名『Mercy ending of the World』……世界の安楽死」

くるみは、歌うような口調で言った。

「暗号名は『Merry-Weekend』。ちょっと、悪趣味ですね」

「でも、その通りになりつつあるでしょう。もう、人類は、次の世代を残すことはできないわ」

Lの口調は、どこか挑戦的である。そんなLと、そしてエイプリルに、一步一步、くるみは近付いていった。

MWVに感染した人類は、生殖細胞の減数分裂を阻害される。

男性であれば精子、女性であれば卵子の発生が妨げられるのである。さらにMWVは、すでに発生した生殖細胞を全て破壊する。事実上、完全に不妊となるのである。

先月以来、新たに懐妊した女性の数は、世界中で、ほぼゼロに近い。そして、そのごくごく少数の“最終世代”も、驚異的な感染力を有するMWVにすでに感染していることが明らかになっていた。

MWVは、他のいかなる影響も、人体に及ぼさない。ただ繁殖力のみを人類から奪うのだ。

性別も、人種も、年齢も、MWVの前には関係なかった。皆等しくMWVの宿主となり、生殖能力を喪失するのである。

「ひどい、です」

豪華な応接セットに座ったままのLとエイプリルの目の前にまで進み、くるみは、ぼつん、とそう言った。

「そうかしら？」

Lは、くるみの、眼鏡の奥の瞳を見つめながら、言った。

「人類にとって、これほど優しく素敵な滅び方は無いと思うけどなあ」

「でも、ひどいです」

「特にこれといった苦痛も無く、周りに迷惑もかけずに、緩やかに滅んでいけるのよ。それに、今まで人類が築き上げてきたものは、無駄にはならないわ。オルガの分身のソフィア、それに、その発展型のAI達が、きちんと継承してくれるもの」

「でも……」

「それともあなたは、まだ存在してもいない子たちの声を聞くことができるとも言うの？」

一瞬絶句した後、くるみは、かすかにうつむきながらつぶやいた。

「……滅びたくない……」

「え？」

「あたしは、滅びたくないんです。人間として……人類としての本能が、そう言ってるんです。それじゃ、ダメなんですか？」

「ダメよ」

Lに代わって、ぴしりとそう言ったのは、エイプリルだった。

「それじゃ、ダメなのよ。まだ、捕われてる……。脳が、遺伝子の策略に捕われてるのよ」

「策略、ですか？」

「そうよ。たかがちょっと構造が複雑なだけの核酸のパターンに、心が支配されてるんだわ」

「そ、そんな風に、分けて考えられませんよ……」

くるみが、困ったような顔で言う。

「……そこまでにしときましようか」

Lが、ふっ、と表情を緩めて、言った。

「で、くるみは、そんなことを言い到此まで来たの？」

「人類結社の一員としてのあたしは、そうです」

「じゃあ、用は済んだってわけ？」

Lに続けてそう言うエイプリルの声は、まだ刺々しい。

「はい。用は……済みました……」

囁くような声でそう言って、くるみは、じっと黙った。

そして、かすかに震える指で、ベストのボタンを、一つ一つ外していく。

ベストをはだけ、ブラウスのボタンを外し、前を空ける。

そしてくるみは、Aカップの可愛らしいデザインのブラのフロントホックを外した。

りん、と、外に解放されたピアスの鈴が、小さな音をたてる。

「やりかけのことは、もう全部終わらせました。だから……もう、あたしは、あたしのものじゃなくなったんです」

くるみは、何か吹っ切れたような口調で、そう言った。

Lが、そんなくるみと、エイプリルの顔を、交互に見比べる。本人は気付いていないかもしれないが、ひどく優しい目だ。

そしてエイプリルは、Lが思わず微笑みを浮かべてしまうほどに、動揺を露わにしていた。

「いいの？」

ようやくそう言ったエイプリルの声は、くるみのものより震えている。

「はい。壊されても、殺されても、棄てられても、異存はありません。くるみは、二人のモノだから……」

くるみは、その幼い顔に、微笑みを浮かべた。

「甘い考えは捨てた方がいいわよ。死んじゃうくらいに責めあげて、そして、一生繋いでやるんだから」

気を取り直したように表情を引き締めて、エイプリルが言う。

「……はい」

そう返事をするくるみの眼鏡の奥の瞳は、そのあどけない顔とは裏腹に、きらきらと欲情に濡れ光っているようだった。

くるみは、全裸の状態、革手錠によって後手に拘束された。

そして、冷たい大理石の床に正座をし、上体を前に倒している。

その頭を、エイプリルは、ヒールの高い靴で踏みつけていた。

左を向いた形で、床に押しつけられたくるみの顔から、眼鏡がすこしずれている。

くるみの白い肌には、赤い鞭の痕が縦横に走っていた。無残に血のにじんだ傷痕は、激情にエイプリルが力を込めすぎた証しである。

「お前はあたしの何？」

未だワインレッドのスーツをまとったままのエイプリルが、精いっぱい冷たい口調で訊く。

「あたしは……あなたの奴隷です……いやらしいメス犬です……」

くるみが、そのまま舌で床を舐めそうな表情で言う。

鞭打ちされて体力を消耗したのか、その声は小さい。それでも、くるみの声は間違い無く淫らに濡れていた。

「ペットの分際で、飼い主のもとから逃げ出したのね」

ぐっ、とエイプリルの足に力が入る。

「ご、ごめんなさい……っ」

「そのくせ、一人になったとたんに、体が疼いて戻ってくるなんて……最低の淫乱ね」

「ごめんなさい……くるみは、いやらしい、淫乱なマゾ娘です……」

「本当に、救いようの無いコよ、あんたってば……」

そう言って、エイプリルは、足をどけてくるみのお下げを掴んだ。

「あうッ！」

乱暴に髪を引っ張られ、悲鳴をあげながら、くるみが上体を起こす。

「舐めなさい」

そう言ってエイプリルは、その長い脚をゆるく開き、股間にくるみの顔を押しつけた。

「ふわい……」

エイプリルは、自らの体液で濡れるのを嫌って、ショーツだけは脱いでいる。そのスーツは扇情的なまでにスカート丈が短く、クニリングスの邪魔にはならない。

くるみは、髪の毛と同じ赤いヘアに縁どられたその部分に口付けした。そして、すでに愛液で熱く潤んでいる場所に、精いっぱい舌を伸ばす。

「ン……」

くるみの、未だたどたどしい舌技よりも、ちらっ、とこちらを見た媚びと憂いを含んだ瞳に、エイプリルはぞくぞくと背中を震わせてしまう。

「ン……んむ……んっ……ム……んぐっ……」

くるみは、そんなエイプリルの官能を知ってか知らずか、懸命に舌を蠢かせ、肉壁を吸い上げた。

そして、そのあどけない顔からは信じられないような、じゅるじゅるというイヤらしい音をたてて、溢れ出るエイプリルの蜜をすする。

「本当に、イヤらしいコね……くるみ……」

エイプリルにそう罵られると、くるみは、頬を赤く染めながら、ますます熱心に口唇奉仕を続けた。

エイプリルのヘイゼルの瞳に、妖しい光が宿る。

「イヤらしいワンちゃんに、ご褒美あげるわ……。残しちゃ、ダメよ」

そう言ってエイプリルは、ぶるっ、と小さく体を震わせた。

「！」

くるみが、閉じていたその目を、大きく見開く。

「んんんんッ！」

愛液とは違う、透明に近い黄色の液体が、くるみの顎からのど元にかけて、一筋、二筋と伝う。

エイプリルが、くるみの口に排尿したのだ。

「んんっ！ んぐ……ンン……んく、んく、んく、んく……」

ようやく事態を把握したくるみは、その可憐な口でエイプリルの小水を受け止め、控え目にのどを鳴らしながら、少しずつ嚥下していった。

エイプリルの頬は上気し、舌が、しきりに唇を舐める。

「ぶあ……」

ようやく全てを飲み干したくるみが、小さく息をついた。

そして、その子どもっぽい顔に不釣り合いな陶然とした表情で、エイプリルの顔を見上げている。

「床にこぼしてるわよ」

そう言われると、くるみは、何のためらいもなく体を倒し、大理石の床に滴ったエイプリルの雫に舌を伸ばした。ピンク色の舌がちろちろと動き、汚穢な液体を舐めとっていく。その顔は、被虐の悦びに蕩けそうに見えた。

「犬なんていいもんじゃないわね、くるみは」

エイプリルが、ハイヒールの先でくるみのおでこを小突きながら言う。

「はい……く、くるみは、便器、です……っ」

さすがに声を震わせながらも、くるみは、自らの人間性を否定する。

エイプリルは、その瞳をきらめかせながら、足でくるみの体をひっくり返した。

「きゃあん！」

悲鳴をあげながら、くるみの小さな体が仰向けになる。

すかさずエイプリルは、その足先で、くるみの恥部を踏みつけた。ぶちゅっ、という水

音とともに、愛液がにじむ。

「どういうことなの？ これ」

「ああっ、ご、ご、ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

「あたしのオシッコ飲んで、こんなに濡らして……くるみってば、水漏れした便器なのね」

「うあああ……っ」

羞恥に顔を染め、泣き声をあげるくるみの最も大事な部分に、エイプリルが体重をかけていく。

ひっく、ひっく、としゃくりあげるくるみのそこからは、しかし、とめどもなく愛液が溢れていた。

くるみのおののきに合わせて、すでにエイプリルの耳に馴染んだ鈴の音が響く。

「……っ！」

エイプリルは、耐えきれなくなったかのように、足をどかし、くるみに覆い被さった。

そして、すでに懐に用意していた双頭ディルドーを自らの陰部に埋め、深々とくるみの秘所を貫く。

「え？ あ、あ、ああッ！」

突然の挿入に、くるみは思わず身をよじった。敏感な粘膜がひりつくように痛み、それがそのまま快感に変わる。

そのくるみの体を押さえ込み、エイプリルは、余裕のない動きをその胎内に送り込んだ。

「あいつ！ ン、んくっ……ふ……ふああああッ！」

「可愛いわよ、くるみ……」

荒い息をつきながら、エイプリルは、くるみの耳にそう囁いた。

「もう、逃がさないから……絶対に……！」

「ンああッ！ あうッ！ ン！ んあううッ！」

エイプリルの言葉に、くるみが、嬌声で答える。

「……あたしが帰ってくるまで、ガマンできなかったの？」

と、エイプリルの背後から、Lが声をかけた。

その手には、やはり双頭ディルドーが握られている。普段エイプリルと使うためのものが一つしかなかったので、Lは、別室にある予備を持ってきていたのだ。

「だ、だってえ……」

さきほどとは打って変わった子どものような声をあげながら、エイプリルがLに向き直る。しかし、その腰の動きは止まらない。

拘束された腕を体の下にしながら、くるみは、甘たらい喘ぎをあげ続けている。

「全く、これじゃあたしが入る余地がないじゃない」

くすくすと笑いながらそう言って、Lは、くるみの頭の脇に座りこんだ。

「ちょっと変則的だけど、しょうがないか」

「あう？ ……んぶっ？」

そして、その小さな口に、ディルドーを差し込む。

「しっかり啜えてるのよ……」

そう言いながら、やはりスーツの下のショーツを脱いでいたLが、ようやく上体を起こしたエイプリルに向き合うようにして、くるみの頭を膝でまたく。

二人の痴態を先ほどから見ていたのか、Lのその部分は、十分過ぎるほどに潤っていた。

Lが、腰を下ろしていく。

「んんん～ッ！」

Lの体重の何割かを、ディルドー越しに喉奥に押しつけられ、さすがにくるみが苦しげな声をあげる。

Lは、かすかに苦笑いして、ちょっと腰を浮かした。そして、くるみの覚悟が定まるのを見計らって、再び腰を落とす。

「はあああ……」

くるみがしっかりと啜え込んだディルドーが、ずずずっ、と膣壁をこすりあげる感触に、Lがうっとりとして声をあげる。

そして、にっこりと微笑みながら、どこか茫然とした顔のエイプリルに向かい合う。

「よかったわね、エイプリル」

エイプリルの細い首に腕をからめながら、Lが優しい声で言う。

「あ、あたしは別に……」

顔を赤らめながら、エイプリルが言う。

「いい顔してるわよ、エイプリル……」

そう言って、Lは、エイプリルの唇に唇を重ねた。

「ん……」

二人は、いつもするように、ぴったりと吸いつくようなキスをした。キスをしながら、ゆるゆると腰の動きを再開させる。

「ン！ ン、ン、ンむ、ンう、んン～！」

秘部と口腔をシリコンの人工ペニスで犯され、くるみは、くぐもった悲鳴をあげた。しかしその悲鳴には、媚びるような響きがある。

くるみを犯す二人は、キスを続けながら、その動きを速めていった。

ぴちゃぴちゃという舌と舌が絡み合う音に、三人の粘膜が立てる淫猥な音が重なり、くるみのピアスの鈴の音が、さらにそれに重なる。

「ン……んはあ……あむ……んくっ……」

「んぶ、……んくっ……んぶ、ン、んんん……」

「ンああ……ンむ……んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……」

もはや三人とも、どれが誰の声なのか、はっきりとは分からなくなっていた。

後手に緊縛され、冷たい床の上で哀れにうごめく幼げな肢体の上で、着衣の二人が濃厚

なキスを続けたまま、妖しげに体をうねらせる。

時々、ミニのスカートの奥に、毒々しい色合いのディルドーが見え隠れする。それは、ぬるぬると淫らな粘液に濡れ、光っていた。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ッ！」

三人は、互いに互いの性感を高め合いながら、同じ頂きへと昇っていく。

「あぐッ……！」

びくっ！ とくるみの小さな体が、弓なりに反った。

そのまま、ディルドーに口を塞がれ、声をあげることもできずに、びくっ！ びくっ！ びくっ！ と、陸に揚げられた魚のように、体を痙攣させる。

「ア、アう、ううううッ！」

「ンはああああああーッ！」

その動きによって、まるで痙攣が伝染したかのように、Lとエイプリルも絶頂を迎えた。

三人のクレヴァスから熱い体液がしぶき、下になっているくるみの体を無残に汚していく。

「はああああああ……」

しばらくして、Lとエイプリル、そしてくるみは、くったりと体を弛緩させた。

さすがにくるみに体重をかけっぱなしにはできないので、Lもエイプリルも、体をどかす。

「んぷぁ……」

くるみの口から、唾液と愛液にまみれたディルドーが、てるん、と抜け出る。くるみの顔はLの淫らな蜜にまみれ、眼鏡はどろどろになっていた。

そんな状態で、どこか恍惚とした表情を浮かべているくるみを見ているうちに、エイプリルの瞳に、危険な光が戻ってくる。

「まだまだこれからよ、くるみ……」

そう言いながら、エイプリルは立ち上がり、くるみの三つ編みを握って、強引に立たせる。

「あう……ッ」

「今日は、寝かさないんだから」

まだ足元がふらついているくるみに、エイプリルがそう囁きかけた。

くるみが、隷従の喜びに浸りきった顔で、エイプリルに肯く。

Lは、悪戯が過ぎる子どもを前にした母親のような困った笑顔で、そんな二人を見つめるのだった。

エピローグ

あれから、半年ほどが過ぎた。

北海道の、とある海水浴場。未だシーズンにはなっておらず、人影はない。

岩山に囲まれた、小さな砂浜である。時期が時期だけに、砂は白く、波打ち際も綺麗なものだ。

俊司と早紀は、誰かに置き忘れられたような一つだけあるベンチに、並んで座っていた。

空は蒼く、その色を反射して海も藍い。かすかに二人の髪をなぶる風までもが、かすかに青色に染まっていそうだ。

岩山にしがみつくように生えている木々が、鮮やかな緑色の葉を茂らせている。

静かだった。

ざああ……んんん……ざああ……んんん……ざああ……んんん……

深く単調なリズムを刻む波の音が、二人の耳にすでに馴染んでいる。

「すてきね、お兄ちゃん……」

純白のワンピースを着込み、つば広の帽子を膝の上に乗せた早紀が、言う。

「そうだね……」

俊司が、眼鏡の奥の目を優しくに細めながら、答える。

「……あのさ、お兄ちゃん。訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

遠慮がちにそう言いながら、早紀は、右隣に座る俊司の顔を覗きこんだ。

「なんだい？」

「あのさ……研究所のコンピューターが壊れて、大騒ぎになったときのことなんだけどさ」

「うん」

「あの時、お兄ちゃん……くるみさんのこと、逃がしたんでしょ？」

「くるみさん？ ああ、児玉さんのことか」

洗いざらしのシャツにジーンズというラフな格好の俊司が、苦笑する。

「どうなの？」

「……そうだよ」

「どうして？」

「自分でも、よく分からないんだけど……」

俊司は、はるか遠くに浮かぶ小さな雲を眺めながら、続けた。

「早紀が、僕の赤ちゃんが欲しいって、泣いただろ。あの時から、ずっと、迷ってたんだよ」

「……」

「正直に言えば、僕は、Lやバーネットさんほど、人類に絶望していない。ただ、自分自身に対する絶望を、人類全体に転嫁していただけなんだ」

「……」

「でも、理性では、人類がAIに全てを継承するというのも、選択肢としてありうるとは、本気で思っていたし、今も考えてるよ。それに、“終末”を意識した方が、人類はよりよい生活ができるんじゃないかとも思ってる。もっと、時間や、生命や、他人や、他のいろいろなものを大切にするような、ね」

「……」

「でも、早紀の言葉を聞いて……もしかしたら、人類には、まだやり残したことがあったかもしれない、と思ったんだよ。それが何かは分からないけどね」

「そう……」

「要するに僕は、心が揺らいでいたんだ。このまま人類を滅亡させた方がいいのか、それとも、人類の時代をもう少し続けたほうがいいのか……傲慢な悩みだけだね。そして結局、一番、無責任な方法をとったのさ」

「無責任な、方法？」

「賭けることにしたんだよ。児玉さんと、人類結社を駒にしてね」

「ふうん……」

そう言って、早紀は、小さくため息をついた。

「児玉さんが持ちかえった情報だけでは、ワクチンが開発できるかどうかは、半々だと思う。MWVは、次々と変種を生み出していくからね。それでも……希望はあるわけさ」

俊司が、自嘲じみた笑みを浮かべる。

「お兄ちゃん、いつもあたしの知らないところで、悩んでるね」

ちょっと拗ねたような口調で、早紀が言う。

「ごめんね。でも、これで最後にするよ」

「ほんと？」

「うん」

子どものように素直な顔で返事をして、俊司が早紀に向き直る。

「もう、父さんのことも、母さんのことも、MWVのことも、人類の終末のことも、全部忘れるよ。これからは……早紀のことだけを、考えるから」

「ほんと？信じちゃうよ？」

「いいよ」

「ふふっ、お兄ちゃんたら……」

そう言って、早紀は、その柔らかな唇で、俊司の唇を塞いだ。

帽子を離し、その細く白い腕を、俊司の首にからみつける。

俊司は、早紀のキスを目を閉じて受け止めながら、その華奢な体を抱き締めた。

「ン……んん……んむ……うん……」

早紀の舌が、大胆に俊司の口腔に侵入し、その舌に絡みつく。

俊司は、それに応えるように舌を蠢かせ、早紀の口内に唾液を送りこんだ。

ぴちゅっ、ぴちゅっ、ぴちゅっ……と音をたてながら、唾液を交換し合う。

ひとしきり、互いの舌と唇を味わった後、二人はようやく口を離れた。

唾液の糸が、二人の唇の間で、一瞬、逆向きのアーチを描く。

早紀は、悪戯っぽい表情をそのあどけない顔に浮かべ、その両脚をまたぐようにして、俊司に向き合った。

「お兄ちゃん……して……」

頬を上気させながら、早紀が言う。

「こんなところでかい？」

そう言いながらも、俊司は、早紀の右腕を左手で支え、右手でその胸をまさぐった。

「あん……だって……したくなっちゃったんだもん」

恥ずかしげに顔を伏せながらも、早紀は、俊司の服の上からの愛撫に身を任せている。

「組織か結社の人が、僕たちを監視してるかもしれないよ」

そう言いながら、俊司は、早紀のワンピースのボタンを、右手だけで器用に外していく。

ふるん、と清楚なデザインのブラに包まれた豊かな双乳が、露わになる。

「早紀だけを見てくれるんじゃないの？」

子どものように口を尖らせて、早紀が言う。

「そうだね、ごめん」

くすくすと微笑みながら、俊司は、両腕で早紀を引き寄せ、その胸の谷間に顔をうずめた。

「あはっ、く、くすぐったアい……」

俊司の頭を抱きかかえるようにしながら、早紀が嬌声をあげた。それにかまわず、俊司は、早紀の柔らかな胸に頬ずりする。

ブラのカップがずれ、小粒の乳首が、外気にさらされる。

俊司は、ぱっくりとそのピンク色の突起を啜えた。

「あうん……」

ぎゅっ、と早紀の腕に力がこもる。俊司が、口内で舌を蠢かせ、ちろちろと乳首を刺激したのだ。

そして、ちゅばっ、ちゅばっ、と音をたてながら、早紀の乳首を交互に吸い上げ、尖らせていく。

俊司の唾液に濡れた早紀の乳首が、ぷくん、と小生意気に勃起するのを見て、俊司はまたくすくすと笑った。

「おっぱい、揉んでほしい？」

そして、胸の谷間から妹の顔を見上げるようにしながら、訊いてくる。

あからさまな言い方にちょっと頬を染めながらも、早紀は、こっくりと肯いた。

俊司は、不安定な姿勢で膝の上に乗る早紀の華奢な体を左腕で支え、その右手を、柔らかな乳房にそおっと這わせた。

「きゃうん……」

優しく微妙なタッチに、早紀は、俊司のシャツを小さな握りこぶしでぎゅっとつかむ。スレンダーな肢体のわりに豊かな乳房を、その手で包みこむように、揉みしだく。その柔らかな弾力を感じながら、俊司は、腕の中の早紀の頬を、ちゅっ、とついばんだ。

「うん……んあ……おにいちゃん、きもちイイ……」

そう言いながら、早紀は、唇を半開きにしながら、俊司のキスを待つ。

が、俊司は、まるで焦らすように、頬や目蓋、おでこ、耳たぶに口付けするばかりで、唇を重ねようとはしない。

「お兄ちゃん……わざと？」

潤んだ目でにらまれ、俊司は苦笑いしながら、ようやく唇を重ねた。

そして、胸を揉んでいた右手を、ワンピースのスカートの中に差し入れる。

「んむ……っ」

ショーツの上から秘部をつままれ、早紀は、くぐもった声をあげた。

俊司が、早紀のショーツの前側の三角部分を引っ張り、股間に布地を食い込ませる。

「んんン～ん！」

早紀は、きゅっ、とその眉を切なげにたわめ、ぶるぶると体を震わせた。

「んはあっ……お、お兄ちゃん、そ、それ……あううん」

くちゅっ、と音が出そうなほどに潤んだクレヴアスに、ショーツが食い込む。

「やあん……そ、そんなにしちゃ、ダメえ……」

はあっ、はあっ、はあっ、と息を弾ませながら、早紀が訴える。

「お兄ちゃん、早紀、もうガマンできないよ……」

妹の可愛いおねだりに、俊司は、ちゅっ、とまた頬に口付けし、そして、一時ショーツから手を離れた。

そして、桃の皮をむくように、早紀の丸いお尻から、ショーツをはいでいく。

早紀は、俊司の腰のあたりをまたいだ膝を交互に上げて、片足ずつ、ショーツから足を外した。

俊司が、早紀の蜜を吸ってぐっしょりとなったショーツをベンチに置く。

一方早紀は、俊司のジーンズのすでに強張っている部分を愛しげに撫で、そして、ジッパーを下ろした。

「お兄ちゃんの、すごい……」

淫らな期待にその瞳を濡らしながら、早紀は、俊司のシャフトにその小さな両手を添えた。白い手と、褐色のペニスのコントラストが、妙にエロチックだ。

「あは……熱くって、ぴくんぴくんしてる……お兄ちゃん、興奮してるんだね」

そう、嬉しそうに言って、早紀は、ゆっくりと腰を下ろしていった。

ぬちゅっ、といった感じで、亀頭の先端が、熱く濡れた粘膜に触れる。

「あ……」

その感触だけで、とろん、と恍惚の表情を浮かべながら、早紀はさらに腰を落とした。
ぬぬぬぬぬっ、と俊司のペニスが、早紀の濡れた肉襞を掻き分け、その熱い体内に侵入して行く。

「ンっ……はああああッ」

早紀が、シャフトから手を離し、俊司の両肩に手を置いた。

ふわっ、とワンピースのスカートが、二人の結合部分を隠す。

「自分からしちゃうなんて、早紀ってばエッチだなあ」

俊司は、からかうような口調で言った。

「だ、だってエ……お兄ちゃんが、早紀をこうさせたんじゃない……」

耳まで赤く染めながら、早紀が反論する。

「そうだね」

俊司は、くすくすと笑って、そして、ゆっくりと下から腰を動かして出した。

「あ、あう……ン……あうン……」

ゆったりとした優しい動きに突き上げられ、早紀が、うっとりとした声を漏らす。

「あ……スゴい……おにいちゃんのが……早紀の中で、う、動いてるウ……」

「きもちいいかい？」

「うん、イイの……な、中で、ぐりぐりってして……あうッ……あ、ああああッ！」

熱い官能のうねりを感じながら、いつしか早紀は、自らも腰を動かしていた。

その早紀の動きに合わせて、はだけたワンピースの胸元からこぼれる乳房が、ふるん、ふるんと揺れる。

俊司は、そんな早紀の双乳を、すくいあげるように両の手の平に収めた。

「はああああッ！」

ぐにぐにぐにっ、とやや激しく乳房を揉まれ、早紀が高い声をあげる。

「お、お兄ちゃん、きもちイイ、きもちイイよお……っ」

「どこが気持ちいいの？」

「お、おっぱいと、アソコが……あ、あう、はう～ん」

「アソコじゃないでしょ、早紀」

そう言って、俊司は、一瞬、素早い動きを早紀の膣内に送りこんだ。

「きゃうううッ！ オ、オマンコ、オマンコが気持ちイイのッ！」

早紀が、まるで湧きあがる快感に鞭打たれたように、体を震わせ、猥語をわめく。

「よく言えたね、早紀……ごほうびだよ」

そう言いながら、俊司は、きゅうっ、と早紀の乳首を摘み上げた。

「ひああああッ！」

早紀の悲鳴とともに、その膣肉が、きゅるるん、と俊司のペニスを締め上げる。

「う……さ、早紀……っ」

俊司は、痛いぐらいの快樂にかすかに眉を寄せながら、ぐいぐいと腰を動かした。

「あ、あうッ！ ひあっ！ ひやううッ！」

早紀も、俊司の首にしがみつくようにしながら、腰の動きを激しくする。

「す、すごいよ、早紀……自分でたててる音、聞こえるかい……？」

「いやあん……！ は、はずかしい……」

「何言ってるんだい。こんな昼間に、外でしてるんだよ……」

「ああ、ああ、ああ、ああ、ああああああッ！」

俊司の言葉に、ますます早紀の性感は高まっていくようだ。その瞳は半ば空ろで、半開きになった唇からは、唾液が一筋、垂れている。

「ほら、聞こえるだろう？ こんなはしたない音たてて……」

「き、聞こえるうッ！ あああッ！ さ、早紀のオマンコ、ぐちゅぐちゅいつてるの、聞こえるよおーッ！」

「他の人に、見られちゃうよ……聞かれちゃうよ、早紀……」

「み、見られてもいいのッ！ あうン！ んくッ！ す、すごい！ いいの、いいーッ！」

「早紀いッ！」

俊司は、半狂乱になって悶える早紀の体を、思いきり抱き締めた。

結果として、体内深くまでペニスで貫かれ、早紀の快感が限界を突破する。

「ひああああああああああああああああああああああああッ！」

絶頂を迎えた早紀の膣内が、まるで射精をねだるように、きゅんきゅんと俊司のペニスを締め上げる。

「うあッ！」

短く叫び声を上げて、俊司も、ペニスの根元に溜まっていた欲望の塊を解放した。

重力に逆らって大量のスペルマが輸精管を通過する感覚。

びゅるるるッ！ と音をたてそうな勢いで、早紀の子宮口に、熱い精液が浴びせられる。

「あーッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あああああーッ！」

びゅくっ、びゅくっ、びゅくっ、びゅくっ、と、ペニスが律動し、スペルマを吐き続けるたびに、早紀はより高い絶頂へと舞い上げられる。

「はぁあ……あ……あああああ……」

そして、二人の体から、ほとんど同時に力が抜けた。

半分失神したような状態で、互いの体温を感じる。

「早紀……」

しばらくして、胸に妹の息遣いを感じながら、俊司は口を開いた。

「ん……？」

「好きだよ、早紀……」

今までは言えなかったその言葉。

もしかしたら、この言葉を言うために、自分は人類を終末に導こうとしたのではないだ

ろうか。

そんなことを考えてしまう。

「あたしも、お兄ちゃんが好き……」

父を殺し、母を破滅させ、人類を滅ぼそうとした自分に、早紀はそう言ってくれる。

俊司は、早紀の体を優しく抱き締めた。

早紀も、俊司の抱擁に応えるように、しがみついてくる。

(もし、今の二人の状態をもたらしたのが、人類の終末であるならば、それも悪くないな……)

未だ快感にぼんやりとかすむ頭で、俊司は、そんなことを考えていた。

終

ZEON PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw